

AUE Environmental Report

愛知教育大学 環境報告書 2022

2022

地方創生 SDGs
官民連携
プラットフォーム



私たちは持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。

2020年度加盟

カーボンニュートラル
達成に貢献する
大学等コアリション



2021年度参加



国立大学法人
愛知教育大学
Aichi University of Education

〒448-0001 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
<https://www.aichi-edu.ac.jp>
施設課 Tel : 0566-26-2152
E-mail : sisetsukikaku@m.auecc.aichi-edu.ac.jp



Contents

AUE Environmental Report 2022

学長メッセージ	3
沿革の略図	5
キャンパス概要	7
【1】教育大学としての特色を生かした環境活動	
Pick up	9
大学教員の取組	11
附属学校園の取組	15
学生の取組等	19
【2】サステナブルキャンパスを目指して	
温室効果ガスCO ₂ 抑制状況	25
マテリアルバランス（環境負荷状況）	27
総エネルギー投入量の抑制	28
グリーン調達の推進状況	29
水資源投入量の抑制	30
廃棄物排出の抑制	31
水質汚濁防止の取組状況	33
大気汚染防止の取組状況	33
化学物質取扱及び管理状況	34
PCB含有廃棄物の管理状況	34
水銀含有廃棄物の管理状況	34
美化活動	35
その他の活動	36
環境配慮の仕組み	37
環境報告書ガイドラインとの対照	38
【3】評価	
学外者からのご意見	39

報告対象期間
■2021年度
2021年4月1日～2022年3月31日

発行日
■2022年9月

報告対象範囲
■刈谷キャンパス 大学・附属高等学校
■名古屋キャンパス 附属幼稚園・附属名古屋小学校・附属名古屋中学校
■岡崎（六供）キャンパス 附属岡崎小学校・附属特別支援学校
■岡崎（明大寺）キャンパス 附属岡崎中学校

参考としたガイドライン
環境省「環境報告ガイドライン（2018年版）」
環境省「環境報告書の記載事項等の手引き」
環境省「環境報告書に係る信頼性向上の手引き」



学長メッセージ

国立大学法人 愛知教育大学
学長 野田 敦敬

「環境報告書2022」をご覧の皆さまへ

本学は、一つの国立大学法人として特定事業者の指定を受け、「環境報告書」を発行し、今回で17冊目となります。「環境報告書」とは、事業者（企業、団体、学校等）が、自らの事業活動によって生じる環境負荷や環境に対する考え方、取り組み等を社会に対して定期的に公表するものです。公表によって、地域の方々や学生、教職員の皆様に本学の取り組みを理解していただき、今後の環境保全や環境対策に協力していただくことを願っています。

私自身も本学の卒業生であり、学部・大学院と学んだ自然科学棟前のヒマラヤスギや卒業式のころ満開となるシダレザクラには特別の思いがあります。また、木陰で「ゼミ」ができれば素敵だと思います。

近年、学生の自然体験不足といった教育的課題に加え、落葉や倒木による建物等の被害低減への対応は、重要な課題となっています。これらの課題への対応として、安全な施設を維持しつつ、以下のとおり『グリーンキャンパス』の実現に向けて」取り組み、SDGsの理念を浸透させていきたいと思っています。



「花プロジェクト」教職員や学生と花の植え替えをする学長（右）

『グリーンキャンパス』の実現に向けて～

- ① 快適な学習環境・職場としてのキャンパス
- ② 自然の営みを学べるキャンパス
- ③ また来なくなる歴史を感じる美しいキャンパス
- ④ SDGsの理念にも合致したエコキャンパス

『未来共創プラン』と環境への思い

2021年3月に本学の新たな中長期ビジョンとして、3つの目標と9つの戦略からなる「未来共創プラン」を策定し、取り組みの一つに「子どもキャンパスプロジェクト」を掲げました。

このプロジェクトは、大学及びその周辺地域を「学び」と「遊び」を一体化できるエリアを実践フィールドとして位置付け、「子どもの声が聞こえるキャンパス」を目指しています。本学初のクラウドファンディング「竹チップで子どもたちにカブトムシに触れる体験を。」「子どもたちに『馬（サラブレッド）とのふれあい体験会』を提供したい」によるイベントや「竹林整備体験会」等を開催しました。キャンパス内に自生している竹や学生の課外活動を子どもたちの自然体験に活かすことで、大学のリソースの再発見に貢献するとともに、将来を担う子どもたちや地域に対して、自然環境や人間と自然との共生について考える機会を設けたいと思っています。



カブトムシの幼虫を掘り起こす子どもの様子



乗馬体験の様子

愛知教育大学 環境方針について

I 環境理念

国立大学法人愛知教育大学は、日々の教育研究活動をはじめとする本学の諸活動を通して、地球環境への配慮や省エネルギーの努力を続け、環境保全や持続可能な社会の構築への貢献などの社会的役割を果たします。

また、教育の総合大学として、高い学識と教養を身に付け、環境問題に理解があり、環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある子どもたちの教育を支え、持続可能な社会の実現に貢献できる専門職の育成に努めます。

II 環境方針

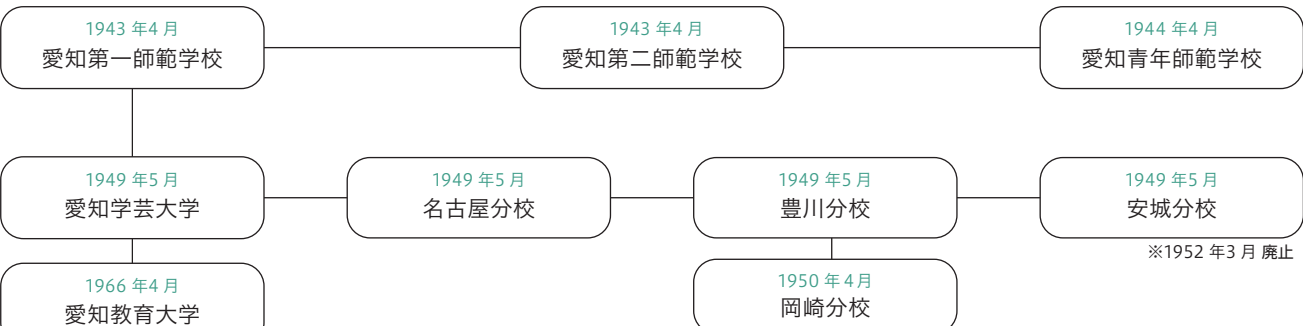
本法人の基本理念に基づき、全ての構成員が協力し、以下の活動を積極的に推進します。

1. 環境に対する豊かな感性や見識を持った専門職を育成し、持続可能な社会の実現につながる環境教育と研究の推進に取り組みます。
2. 環境関連法令等を遵守し、環境への負荷を正確に把握するとともに、省エネルギー、省資源、廃棄物の削減、資源の再利用等に係る目標を設定し、その実現に努めます。
3. 環境保全活動などの情報の公開を行い、地域社会と連携を図りながら、地域環境や地球環境の保全、改善に貢献します。

2017年3月13日制定



沿革の略図



大学キャンパス(1970年頃)



第一共通棟(1970年頃)



教育交流館(現在)



附属図書館(現在)



第一共通棟(現在)



①刈谷キャンパス
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1



土 地	488,136㎡
建 物	98,899㎡
構成員 教 職 員	382人
学 部 学 生	3,683人
大学院学生	265人
専攻科学生	32人
附属学校生	434人
計	4,796人

②名古屋キャンパス
愛知県名古屋市中区大幸南 1 の 126



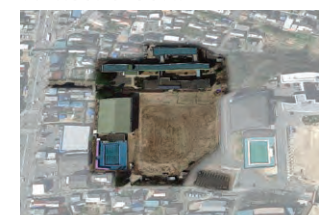
土 地	55,228㎡
建 物	15,870㎡
構成員 教 職 員	75人
附属学校生	1,193人
計	1,268人

③岡崎(六供)キャンパス
愛知県岡崎市六供町八貫 15



土 地	64,348㎡
建 物	11,034㎡
構成員 教 職 員	58人
附属学校生	615人
計	673人

④岡崎(明大寺)キャンパス
愛知県岡崎市明大寺町栗林 1



土 地	21,397㎡
建 物	6,546㎡
構成員 教 職 員	28人
附属学校生	432人
計	460人

その他 研究施設等

生駒野外実習地
土 地 7,357㎡

全キャンパス

土 地	637,968㎡
建 物	132,349㎡
構成員 教 職 員	543人
学 部 学 生	3,683人
大学院学生	265人
専攻科学生	32人
附属学校生	2,674人
計	7,197人

キャンパス概要

PICK
UP



自然科学棟 (2021年6月完成)



美術・技術・家政棟 (2022年1月完成)



養護・幼児棟 (2022年3月完成)



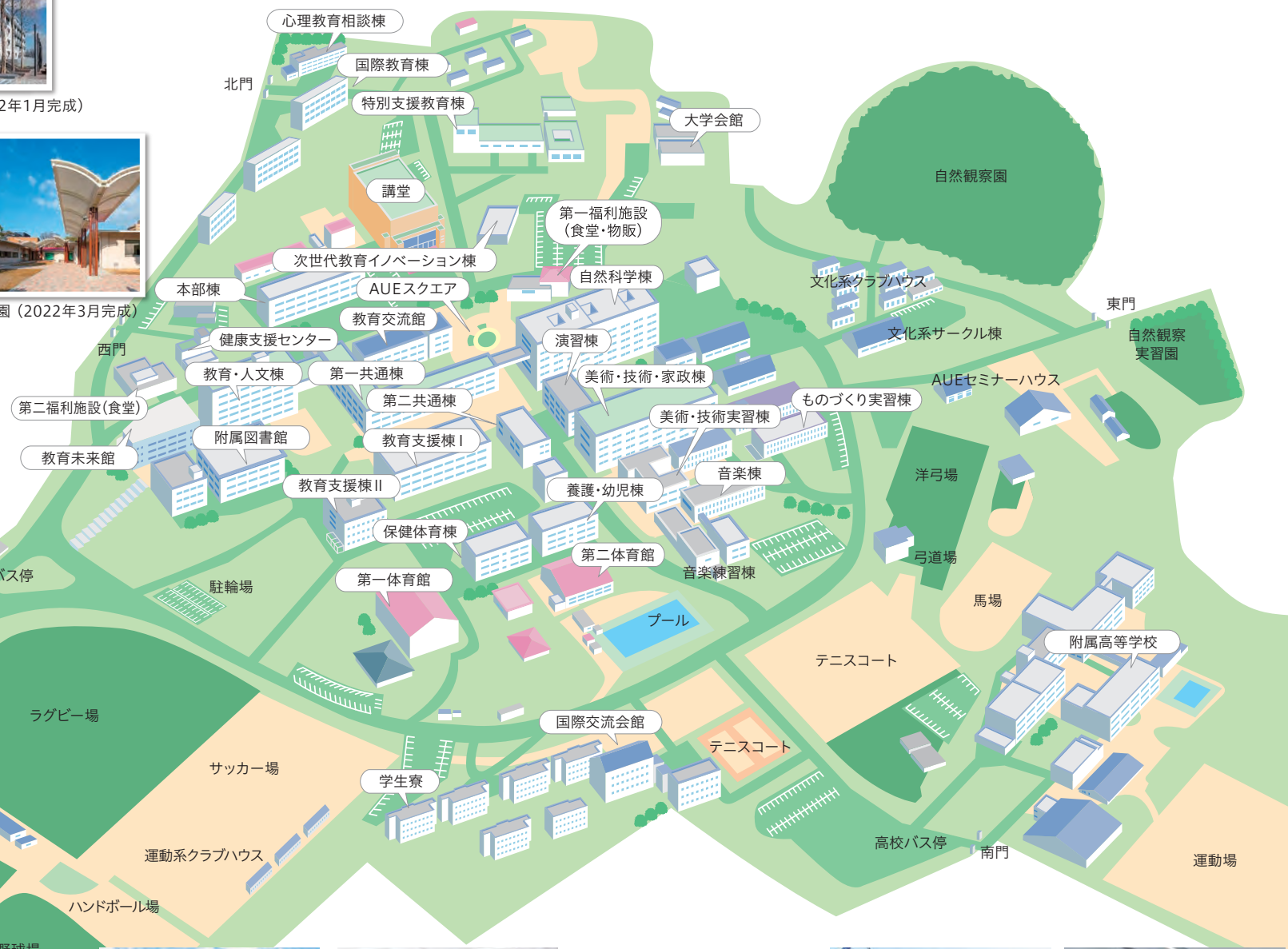
保健体育棟 (2022年3月完成)



附属幼稚園 (2022年3月完成)

2021年度に自然科学棟、美術・技術・家政棟、養護・幼児棟、保健体育棟を全面改修しました。新たにオープンラボや模擬授業ルーム、ラーニングコモンズなどを整備し、Society5.0に向けた教育やSTEAM教育の充実を図りました。

また、附属幼稚園を全面改修をしました。全体的にリノベーションを図ると共に増築をすることで、教育環境の改善を図りました。



附属図書館



次世代教育イノベーション棟



教育未来館



国際教育棟



教育・人文棟



- ・陸上競技場 ……1周400mトラック1面
- ・野球場 ……1面
- ・サッカー場 ……1面
- ・ラグビー場 ……1面
- ・ハンドボール場 ……2面
- ・プール ……50m 9コース
- ・洋弓場 ……1面 (30・50・60・70・90m)
- ・弓道場 ……1棟
- ・テニスコート ……12面
- ・馬場 ……1面
- ・第一体育館 ……1棟
(バスケット、体操、バレーボール、バドミントン、ハンドボールなどに利用)
- ・第二体育館 ……1棟
(バスケット、バドミントンなどに利用)
- ・体育館附属棟 ……1棟
(卓球、舞踊などに利用)
- ・武道場 ……1棟
(各種武道に利用)
- ・トレーニングセンター棟 ……1棟



AUEセミナーハウス



教育交流館/AUEスクエア



愛知教育大学附属学校園の紹介



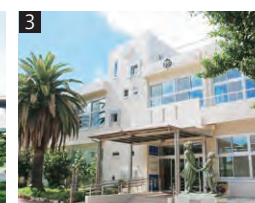
1



(2022年3月完成)



2



3



4



5



6



7

- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 附属幼稚園 | 〒461-0047 名古屋市東区大幸南1の126 |
| 2 附属名古屋小学校 | 〒461-0047 名古屋市東区大幸南1の126 |
| 3 附属岡崎小学校 | 〒444-0072 岡崎市六供町八貫15 |
| 4 附属名古屋中学校 | 〒461-0047 名古屋市東区大幸南1の126 |
| 5 附属岡崎中学校 | 〒444-0864 岡崎市明大寺町栗林1 |
| 6 附属高等学校 | 〒448-8545 刈谷市井ヶ谷町広沢1 |
| 7 附属特別支援学校 | 〒444-0072 岡崎市六供町八貫15 |

教育大学としての特色を活かした環境活動



Pick Up

Pick Up 1 本学のカーボンニュートラル達成に向けての取組

施設課

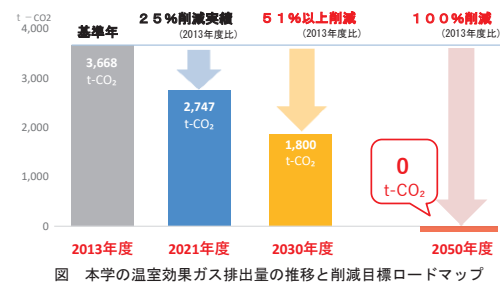


2020年10月、政府は、2050年までに温室効果ガスの排出量をゼロにする「カーボンニュートラル」を目指すことを宣言し、さらに2021年10月、業務その他部門において2030年度までに温室効果ガスの排出量を51%削減（2013年度比）とする目標を掲げました。また「2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略（2021年6月）」においては、人材育成や研究開発を速やかに推進することを求められ、初等中等教育にて「環境教育の充実」を図ること、地域社会との連携にて「知の拠点」化を強化し「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション※」等を推進することが明記されました。

【取組1】2050年のカーボンニュートラル達成を目指して

大学施設の中長期的計画（キャンパスマスタープラン等）において省エネルギーの取組を、全学的な取組（優先的課題）として位置付けています。近年の政府動向や社会情勢を踏まえ、本学においても、これまでの環境への取組を発展させ2030年度までに温室効果ガスの排出量を51%削減（2013年度比）、2050年までにカーボンニュートラルの達成を目指します。

本学では、建物の大規模改修時等において、積極的に省エネルギー改修（省エネ機器の導入・建物の断熱化）を行っており、2021年度までに温室効果ガスの排出量を25%削減（2013年度比）することができました。2050年度までのカーボンニュートラルの達成に向け、引き続き「省エネルギー改修」や「省エネルギー啓発活動」等を推進していきます。



【温室効果ガス排出削減対策】

- ・省エネルギー改修 (LED・高効率空調・建物の断熱化等)
- ・創エネルギー (太陽光発電)
- ・省エネルギー啓発活動

※創エネルギー：太陽光 PPA 事業導入検討等
※再生エネルギー：電力購入等で補填調整

図 本学の温室効果ガス排出量の推移と削減目標ロードマップ

【取組2】「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション（人材育成 WG）」活動

「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」は、5つのワーキンググループ（WG）で構成されており、本学は、2021年度より「人材育成 WG」に参加し、主に教育研究分野での地域貢献活動を推進しています。この活動において、自治体と連携した環境教育活動を提案・報告し、特に「教育教材開発（SDGs カルタ・すごろく等）」は、多くの WG メンバーから好評を得ました。

※参考 HP：カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション

<https://uccn2050.jp/>

SDGsかるた & SDGsすごろく



Pick Up 2 SDGs AICHI EXPO 2021に愛知教育大学ブースを出展

地域連携課



2021年10月22日（金）23日（土）、Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）展示ホール A において開催された「SDGs AICHI EXPO 2021」に本学がブースを出展しました。

SDGs AICHI EXPO は、「地球・まち・ひとが共生できる社会へ～多世代パートナーシップでつくる SDGs あいち～」をテーマに、各主体の取り組みを発信していくと同時に、個別の課題を相互接続的に捉え、地球・まち・ひとが共生する持続可能な社会の姿を描き出すことを目的として開催されました。

本学関係は、小・中学校、高校、大学などの未来の担い手である若者の出展エリアである「ユースエリア」に愛知教育大学と愛知教育大学附属高等学校サスティナ部がそれぞれブースを出展しました。

本学のブースでは、学生団体 SAGA によって、小学生から大人まで幅広い世代の方々にわかりやすく SDGs を理解していただける教材の体験や各種資料の提供、本学で実施している ESD for 2030 AICHI プロジェクトなど、SDGs 普及のためのさまざまな活動を紹介しました。

また、附属高等学校サスティナ部では、高校生が自分たちの行う SDGs に向けた取り組みの発表を、愛知学長懇話会のブースでは、本学の SDGs に関する取り組みについてのポスター出展を行いました。

当日、多くの方にブースに立ち寄っていただき、本学の取り組みや学生の活動に興味を持っていただくことができました。今回のブース出展により、本学の SDGs 普及活動を知っていただくと同時に、今後、地域との連携を広げていく大変よい機会となりました。



ブース出展の様子



SAGAの学生たち

開発教材の体験

Pick Up 3 愛知県ユネスコスクール指導者研修会を開催

地域連携課



本学は、2012年1月にユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUUnivNet）に加盟し、以降、愛知県内の学校のユネスコスクール加盟申請及び加盟校の活動に係る支援を実施しています。また、大学としても、2012年12月にユネスコスクールに加盟し、エコキャンパスの展開、科学・ものづくり教育の推進、国際交流活動等の実施により、ユネスコの推進する ESD に関わる活動を推進しています。

その活動のひとつとして、2021年10月16日（土）、名古屋市のウィル あいちにおいて、「愛知県ユネスコスクール指導者研修会」を開催しました。本研修会は、ユネスコスクール活動支援の一環として毎年開催し、愛知県内の ESD 活動の一層の推進を図るため、ユネスコスクール先進校による実践活動報告や互いの情報交換等の機会を提供し、ユネスコスクール間のネットワーク作りを支援するとともに、未加盟校においては ESD 活動を始めるきっかけづくりになることを目的としています。

昨年度に引き続き、愛知県教育委員会が主催する愛知県ユネスコスクール交流会と同日、同会場で開催しました。また、新型コロナウイルス感染症対策のため、オンライン参加と会場参加を併用するハイブリッド形式で開催しました。

独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA 中部）の江口由希子氏による「JICA の教育協力～国内外の事例から～」と題した講演のほか、県外4校の先進校と本学附属岡崎小学校及び附属名古屋中学校から各校の ESD 活動について、分科会形式で実践発表を行いました。



講演者・発表者による記念撮影



講演の様子

大学教員の取組

大学教員の専門分野を活かした環境教育活動及び地域貢献活動について報告をします。



自然や環境に優しい木のおもちゃとベンチの展覧会

幼児教育講座／樋口 一成



2021年4月17日(土)～6月27日(日)の会期中、おかげさまで世界子ども美術博物館にて「動きや音を楽しむ 樋口一成 木のおもちゃ展」を開催しました。会場には、転がったり落ちたりする素朴でユニークな動きをする木のおもちゃ49点と鉋・鋸・テープカッターなどの道具の形をした木のベンチ7点の合計56点を展示しました。

今回の展示作品である木のおもちゃとベンチは、6年前から連携している根羽村森林組合(長野県)、3年前から連携している豊田森林組合(愛知県)で製作して頂きました。

このうち、根羽村森林組合で製作して頂いたものは、自然や環境のことを大切に考え守られている森林で育った木やそれらの木から作られた製品であることを示す「SGEC」のロゴマークを使用することが認められた根羽村の木から作って頂きました。また豊田森林組合で製作して頂いたものは、愛知県内の森林で育った良質の木であることやそれらの木から作られた製品であることを示す「あいち認証材」のロゴマークと、木々が豊かに育つために間伐という作業が適正に行われていることを示す「間伐材マーク」のロゴマークを使用することが認められた愛知県の木から作って頂きました。

本展の会期中には、16416名の方々に来場して頂き、自然や環境に優しい木のおもちゃとベンチに触れたり遊んだりして頂きました。会期中、会場は木のおもちゃから響く心地よい音と会場全体に広がる檜の香りに包まれていました。



木の音と香りに包まれた展覧会場

中部電力パワーグリッドと連携した次世代エネルギー・環境教育活動

社会科教育講座／阿部 亮吾



本学では、2017年3月に(現)中部電力パワーグリッドと連携協定を締結し、次世代エネルギー・環境教育に力を入れてきました。具体的には、名古屋市教育委員会主催の「名古屋土曜学習プログラム」(写真1)に参画し、本学学生が名古屋市内の小学生に発電の実験や電気の流れを教える特別授業を行ったり、でんきの科学館で静電気の「おもしろ実験ショー」(写真2)の講師を務めるなどしています。また、学生教育の一環として、変電所や発電所といった電力関連施設の見学会(写真3)にも取り組んできました。2019年度

以降は本学の企業体験活動の一部に組み込まれ、学生の選択必修科目の1つになっています。2021年度の活動に参加した学生からは、「子どもたちが楽しみながら電気を学んでもらえたことが実感でき、とても良い経験になった」や、「準備を進める中で多くのことを学べたので今後に生かしたい」といった声が聞かれ(『電気新聞』2021年12月17日付)、将来の学校教員を目指している学生にとっても学びと成長の機会になっているようです。



(写真1)「名古屋土曜学習プログラム」の様子
(名古屋市内小学校にて、2021年12月11日撮影)



(写真2)「おもしろ実験ショー」の様子
(でんきの科学館にて、2021年11月20日撮影)



(写真3)「見学会」の様子
(電力関連施設にて、2021年7月28日撮影)

学校でのSDGsを学習するためのポスター教材の開発

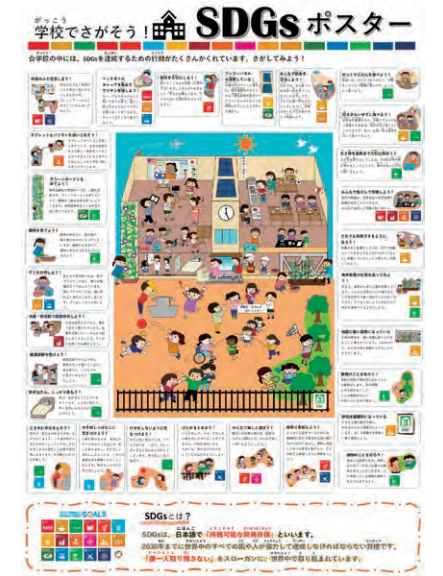
理科教育講座／大鹿 聖公



本研究室では、小学校を対象に簡単にSDGsを学習できる教材の開発に取り組んでいます。2020年度は、まちづくりを通して、施設や職業がどのようなSDGsに貢献しているかを学習する教材を開発しました。2021年度は、小学校自体をSDGsの活動の場として児童が理解し、小学校においてSDGsを実践していけるような教材の開発に取り組みました。

開発した教材は、「学校でさがそう! SDGs ポスター」です。このポスターは俯瞰した小学校をイラスト化し、その中に様々な教室や学校環境、さまざまな児童の様子が描かれています。そこでの教室や児童の行動がSDGsのどのような目標に結びついている、イラストの解説を周囲に配置しています。

本教材を、小学校の廊下などにポスター掲示することで、児童の学校での生活とSDGsとの関係など一人で読んで学習することが可能です。2021年度、本教材を附属名古屋小学校において、小学校でのSDGsについて考える授業実践を行いました。その結果、多くの児童が学校の中でのSDGsを見つけ、さらにはSDGs達成に向けて、自分たちの行動について考えるようになっていました。今後、ポスター掲示や授業実践など、いろいろな場所や場面で活用されることを期待しています。



開発したSDGsポスター

学内にある自然観察園内の雑木林で行った自然体験

理科教育講座／常木 静河



教師教養科目のひとつとして、2020年度より学内の自然観察園で自然体験活動を行っています。観察園内で拡大しているモウソウチク林を活用して、竹細工、木登り、秘密基地づくり、最終日には竹林整備を実施しています。各実施日に、教員は道具の貸し出しと各班の見守りを行っています。うまくできた学生さんがうまくいかなかった学生さんへ教える姿や授業時間後も残って竹とんぼを改良していた様子が見られ、学生間での学びあいの場になっているようでした。また、3mを超える竹梯子を制作し、協力しあって大きな木へ登った班や、秘密基地でも滑り台やブランコなどを工夫して

つくったりしている班がみられました。2020年度の事前アンケートでは、自然体験を指導することに関してできない・チャレンジしたいが自信がないという回答が全体の80%であったのに対し、事後アンケートではあまり自信はないが行うことができる・自信をもって行うことができるという回答が80%となっていました(回答数事前39、事後34)。ナイフをつかったり、竹をのこぎりで伐採したり、秘密基地を計画・実施するという原体験を重ねることが、学生の創造性や自信につながることがわかり、授業者としてもおもしろさを感じました。



作業風景1



作業風景2



作業風景3

「子どもキャンパスプロジェクト」の試行的取り組み

保健体育講座／縄田 亮太



2021年12月12日（日）、愛知教育大学未来共創プラン戦略1「子どもキャンパスプロジェクト」の試行的取り組みとして、井ヶ谷子ども会と合同でクリスマス会を実施しました。井ヶ谷子ども会から93人（子ども77人、大人16人）、大学から23人（学生21人、教職員2人）の合計116人が参加しました。

このプロジェクトは大学およびその周辺地域を『学び』と『遊び』を一体化できるエリアとして、教科等横断的な実践フィールドと実践プログラムを提供するものです。第4期中期目標・中期計画期間（2022～2027年度）に正式な事業として開始するものですが、今年度はその準備期間として試行的にプログラムを実施します。今回は井ヶ谷子ども会の行事であるクリスマス会を子ども会の方々と共創しました。

子どもたちは低学年、中学年、高学年の3グループに分かれて、それぞれ3つのプログラムを体験しました。プログラムはクイズラリー（美術・技術実習棟前広場）、理科実験（第2体育館）、スポーツ（第1体育館）で、すべてのプログラムを順番に体験しました。参加した子どもたちからは「クイズラリーが面白かった」「もっといろいろな工作をしたい」「またスポーツをたくさんやりたい」「大学のことをいっぱい知りたい」、保護者の方からは「子ども会と地域の大学と



のかかわりが持てて、より身近になったと思う」「元気なお兄さんお姉さんと楽しそうに遊んでいたからやってよかった」などの感想が寄せられました。参加した学生からも「子どもたちの『楽しかったね、もっとやりたいね』この一言が聞けただけでとても嬉しかった」といった感想がありました。



形状記憶合金を用いたバッテリーの要らない介護等作業補助具の開発

技術教育講座／北村 一浩



愛知県は2019年にSDGs未来都市に選定され、それに伴いSDGs達成のためのさまざまな取り組みが教育・研究活動を通して行われています。技術専攻・北村研究室では、「形状記憶合金を用いたバッテリーの要らない介護等作業補助具の開発」のテーマで卒業研究をおこなっています。本研究は、SDGsの目標7、「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」に対応した取り組みです。

形状記憶合金は一定のひずみ範囲において発生荷重がほとんど一定となる「超弾性特性」を持っています。この材料自体が力を発生する「超弾性特性」を応用すれば、外部からの電気エネルギーを使わない介護等作業補助の実現が可能となります。

介護等でおこなわれる代表的「ベットケア」や「車椅子移乗」の動作には、僧帽筋や三角筋、上腕二頭筋が主に使われます。本研究では、これらの筋肉への負担を軽減する介護等作業補助具を開発しています。開発した作業補助具の評価は、「筋電測定」によりおこないました。筋電とは、筋肉を動か

すための脳からの電子信号のことであり、筋肉への負担に比例します。筋電測定の結果、僧帽筋と三角筋において、作業補助具がない場合と比較して、作業負担が最大40%軽減されることが明らかになりました。補助具により、介護等の作業負担が軽減され、介護者の作業環境の向上が期待されます。



廃材を活用したものづくり活動の充実を目指して

技術教育講座／磯部 征尊



本講座の実習の一つとして、木材加工に関連した実習があります。これらの実習では、主に、木材を活用したものづくりを行います。木材加工実習を行う実習室内には、何種類もの廃材があります。各受講者には、製作条件の一つとして、「廃材を使用すること」を勧めています。それは、技術教育で大事にしている技術の見方・考え方の環境面や経済面を考慮することにつながるからです。

受講者の内、学生Aは、「環境に配慮した頑丈な四脚椅子」を製作しました（写真1）。ほとんどの材料は、廃材を使用している点が特徴的です。学生Bは、4本の足の部分を中心に、廃材を活用した作品を完成させました（写真2）。廃

材を使用する際、表面処理を行いながら丁寧に作業を進めている点が印象的でした。

卒業研究を進める学生の中には、木材を活用した題材開発を研究テーマに取り上げて研究を進める学生がいます。2021年度の学生Cは、COVID-19を防ぐための必需品であるマスクを収納するケース（以下、マスクケース）の開発研究を進めました（写真3）。学生Cは、廃材を活用しつつ、試行錯誤を繰り返しながら、小学生でも製作できるマスクケースを完成させました。

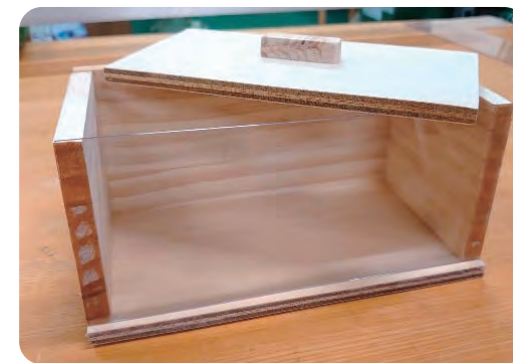
今後も、廃材を利用したものづくり活動の充実を目指す研究及び教育活動を進めていきたいと考えています。



（写真1） 製作品①



（写真2） 製作品②



（写真3） マスクケース

自らの学びをSDGs活動に生かす

健康支援センター／榎原 洋子



SDGsの学びを自らの行動に活かす試みとしての授業づくりを心掛けています。毎年100名ほどの学生らが受講している市民リテラシー科目「環境安全リスクと私たちの健康」は、令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、前半は対面式で後半はオンライン講座となりましたが、生活環境から地球規模の環境までの化学物質や廃棄物問題を中心に、マイクロプラスチックやアスベストなどの現代的課題を取り上げた授業を受けながら、受講生各自がSDGsの17の目標から選んだテーマで自主課題研究に挑み、調査活動をしました。その結果をレポートとしてまとめたうえで「これから私たちができること」を提案し、オンライン発表会を行いました。

また、前年度の受講生で「将来世代の社会創造に役立てたい」、「将来、教員になった時に自分が使う教材にしたい」、「受け取る側の目線と感覚を大事にしたい」と名乗りを上げてくれた有志数名の協力を得て、小学校高学年以上を対象にしたアスベスト教育動画3篇を課外活動として制作しました。タイトルは「アスベストってなに?」「身近なアスベストと対策」「アスベストの観察と偏光」で、授業内で紹介することができました。これらの教育動画は、愛教大での授業にとどまらず、アスベスト・リスクコミュニケーションのための社会活

動にも活用され始めています。

＊動画制作には、地球環境基金助成金「大気汚染防止法改正に伴うアスベスト飛散防止対策及び災害時のアスベストばく露防止対策におけるリスクコミュニケーションの普及・啓発活動」を活用しました。



動画「アスベストの観察と偏光」の1シーン

附属学校園の取組

附属学校園（高等学校・名古屋中学校・岡崎中学校・名古屋小学校・岡崎小学校・幼稚園・特別支援学校）の環境教育活動及び地域貢献活動について報告をします。



サスティナ部の竹林整備活動

愛知教育大学附属高校のサスティナ部は、人文科学、自然科学の2分野に分かれて、それぞれSDGsの目標達成に向けた活動を行っています。自然科学の中のアグリ部門は、2年前から校舎裏の放置竹林の整備を始めています。

放置竹林の整備活動は、SDGsにある二つの目標、「11：住み続けられるまちづくりを」と「15：陸の豊かさを守ろう」の達成に貢献できます。アグリ部門の生徒は、竹林内で倒れ朽ちた竹を取り除き、古い竹を伐採し、日の光が差し込む、美しい竹林づくりを目指しています。

毎年4月には竹の子狩りを楽しみ、立ち寄った人が自由に散歩し、心安らげる場所にしたいと考えています。

愛知教育大学の実習園を担当する方から、かつて竹林に高校から実習園へ繋がる道があったという話を聞き、その再現に向けて少しずつ開拓を進めています。整備のために大量に伐採した竹は、実習園担当の方々



のご協力で、竹チップperを用いて竹チップにしています。竹チップは、切り開いた竹林に厚く撒いて、竹林整備に役立っています。また、コンクリートブロックやペール缶を利用した簡易な窯を作り、竹炭づくりにも取り組んでいます。竹炭は校内の消臭や浄水研究活動に活用していく予定です。

竹林の整備にはとにかく時間と労力がかかります。生徒たちは、作業ができる限られた時期に、怪我をしないよう十分注意しながら、じっくりと作業を行っています。

附属高等学校／川上 佳則



学校祭 ～「職業」をテーマに「未来」を考える～

毎年、様々なテーマを掲げて行われる本校の学校祭。2021年度は「職業」をテーマに、学校全体で職業について学ぶことを通して、「現在」だけでなく、「未来」のことまで考えるための視野を広げていくことを目指しました。そこにSDGsの視点を取り入れることで、自分自身のことだけでなく、他者、あるいは国際的な視野をもちながら、将来について考えるきっかけにすることを目標に活動に取り組みしました。

新型コロナウイルス感染防止の観点から、保護者や外部から観客を招くことができなかったため、発表は生徒・教員のみの観覧にとどめ、外部向けには後日映像を配信しました。

「政治」をテーマにした1年生のクラスでは、世界各国の政治家が取り組んでいることを国ごとにまとめ、発表しました。例えば、イギリスで行われている環境に対する取組や、フィンランドで行われている教育の無償化に関する取組などを映像や掲示物で紹介しました。

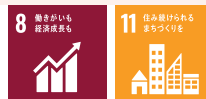


「IT産業」をテーマにした2年生のクラスでは、IT企業と環境保全との関わりを調査しました。IT産業が地球温暖化を食い止める可能性について、ストーリー仕立ての映像で発表しました。

「接客業」をテーマにした3年生のクラスでは、有名テーマパークの接客方法を調査しました。体の不自由な人にも優しいアトラクション施設や、ジェンダーレスを意識した展示方法、有機野菜を使用したレストランなど、あらゆる場所でSDGsの視点を意識した接客が考えられていることを紹介しました。

学校祭を通して、SDGsの視点から見たそれぞれの職業の将来像を捉えることができ、SDGsは単なる未来目標ではなく、自分の将来の生き方を考える上でも重要な視点であることを学ぶことができました。

附属名古屋中学校／石田 賢司



電力と共に生きる未来 ～電力自由化は持続可能なエネルギー供給につながるのか～

附属岡崎中学校／奥村 仁

本単元では、日本の電力自由化に着目し、電力システムの歴史や背景、現状にふれる中で、これからの電力の供給や消費のあり方について考えました。近年、電力の小売が自由化されたことで、携帯料金とのセット割の電気料金プランや新電力参入の宣伝や広告などを耳にするようになりました。また、2020年には大手電力会社の送配電部門の分社化が実施され、更なる電力システムの変革が進んでいますが、その現状や実態について国民の認識は希薄であるといえます。電力は生活の基盤となるエネルギーであり、これからも安定した供給と適切な価格設定が求められ、国民一人一人が意識して考えるべきことです。更に、現在、脱炭素社会への移行が求められているため、電力を含むすべてのエネルギーの供給について真剣に向き合う必要性が高まっています。そこで、電力自由化の是非に迫りながら、未来のエネルギーの供給や消費のあり方を模索しました。

子どもは、どうすれば電力自由化が価値あるものになるのかを追究しました。これまで電力供給を支えてきた電力会社や新電力として参入した会社を取材し、電力を供給する側の現状に対する見解を知りました。一方、電力を消費している一般家庭にアンケートをとったり、多くの電力を消費する生産業の企業を取材したりして、電力を買う側の願いや要望を把握しました。また、省庁や自治体など電力自由化を推進する機関の考えを聞き、目的や今後の展望について理解してきました。そのうえで、電力自由化が価値あるものになるための方策について話し合いました。

そこでは、「脱炭素社会を旨し、CO₂排出量の大幅削減を宣言した以上、再生可能エネルギーの利用を増やすことがもっとも重要である」という意見に焦点が置かれました。これに対して、大手電力会社を取材した子どもから、「再エネだけで電力を安定して供給することは難しく、脱炭素を急ぐのは現実的ではない」「再エネの割合を増やせば、今よりも電気料金が高くなってしまい、消費者が困るのではないか」という反論が出るなど、白熱した議論が展開されました。

単元を終えた振り返りを一部紹介します。
○電力自由化について調べていく中で、安定して電力を供給することの難しさを実感しました。最初は、安易に再エネに変えればよいと考えていましたが、再エネを増やせば増やすほど、電力料金が上がったり、停電するリスクが高くなったりすると感じるようになりました。ただ、持続可能な社会を目指すうえで、脱炭素は避けられないと思うので、国民一人一人がエネルギーについて真剣に考え続ける必要があると思いました。



再生可能エネルギーを増やす
必要性を訴える子ども

「なぜ、コメダ珈琲は森を守っているのか？」

附属名古屋小学校／笠巻 一倫

5年生の社会科のまとめとして、「わたしたちのくらしと環境」という学習をします。これまで学習してきた産業の全てが「環境」というキーワードでつながり、わたしたちのくらしの基盤となるからです。子どもたちは、「なぜ、日本の環境は守り続けられているのか？」という学習問題を、追究しました。調べていくと、産業が発展することで環境を壊してしまったという歴史があり、それを復活させようと努力してきた人々がいたこと。また、災害が起こりやすい自然環境であり、現在も被害が出続けているが、人々の命を守るために対策をしていることを知りました。

そこで、3年生からずっとお世話になっているコメダ珈琲さんが森を守る活動をしていることを紹介しました。「なぜ、コメダ珈琲は森を守っているのか？」それは、店舗の



テーブルに使われている木材を守り、企業理念である「くつろぎ」の場になるようにとの思いからでした。「コメダ珈琲は、もっと環境に良い活動をしていきたい。どんなことをすればいいかな？」と問いかけられ、子どもたちは必死に考えました。「どうすれば、コメダさんの取り組みを知ってもらえるかな？」「CO₂を減らすために、太陽光発電をお店に取り入れるといい」様々なアイデアが出ました。子どもたちにとって、環境を保全することが「自分事」となり、環境に優しい社会を創る大人になってほしいと思います。



5年 社会科「手を取り合って 未来に豊かな森林を届けたい - 額田の森を守る人々 -」

附属岡崎小学校／豊田 家康



衛星写真を見た子どもたちは、日本には森林が多いことに気づきました。調べていくと、国土のおよそ3分の2が森林で、40%程度が人工林であることがわかってきました。また、自分たちが暮らす岡崎市もおよそ3分の2が森林（額田の森）で、人工林は60%を占めていることをつかみました。「森林の働き」について調べていくと、「保水」「自然災害防止」「地球温暖化防止」「生物の多様性」など、様々なよさが見えてきました。すると、「森林がたくさんある岡崎市や日本はとてもよいところだ」と子どもたちは考えるようになりました。そこで、市役所森林課の方や額田の森を守る活動につながるボランティアをしている市民の方、実際に額田の森で林業を営む方と段階的に出会わせました。それにより、現在の岡崎市では、手入れ（間伐）の行き届いていない森林が多く、土砂災害が発生しやすくなっていることや、林業をする人が減少していること、間伐することのよさなどを知りました。3人の方の話を聴き、子どもたちは「どうして額田の森は守り切れていないのかな」という問いをもち、ひとり調べを進めました。調べていくと、その背景には、人々の生活の仕方の変化があることが見えてきました。また、問題に対する市民の意識の低さに気づきました。行政と林業家、市民が協力していかなければ、豊かな森林を未来に残すことができないと考えた子どもたちは、自分たちにできること



を考え、行動に移し始めました。額田の森の現状や林業について紹介するプログラミングを用いたCM作り、地元や国産の木材を使うことを呼びかけるポスター作り、学んだことを発表し、これからの森林とのかかわり方を市民に訴えるラジオ放送、国産木材を使ったジオラマ作りや工作など、少しでも額田の森を守ることの大切さを市民に働きかけよう取り組みました。この単元を通して、子どもたちは、社会科における学びとともに、森林環境や豊かな未来を後世に繋いでいくことに対する意識を高めることができました。



豊かな自然環境を生かして幼児の学びにつなげる

附属幼稚園／水谷 幸子



附属幼稚園には豊かな自然があります。5月末、年中児が園庭でカタツムリを見つけ、うれしそうに持ってきました。教師は大きめの飼育ケースを用意し、幼児同士でうれしさを共有したり、興味をもって触れたりできるようにしました。年中児たちは「出たおいで」「顔見せて」と呼びかけながら見守りますが、カタツムリは殻の中に入ってしまうかなか出てきません。そのカタツムリの周りで、教師がそっと用意した図鑑を見たり、今まで読んだ絵本の場面を思い浮かべたりした年中児たち。「そうだ！カタツムリは雨が好きだから水を入れよう」「カタツムリは緑の葉っぱが好きなんだよ」「ご飯あげよう！緑の葉っぱ！」と一人一人が一生懸命考えてい



ました。

幼児教育は環境を通して行う教育であり、幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき意図的・計画的に構成された環境が必要です。それを生かし幼児の学びにつなげていけるよう、教師は日々工夫しています。その環境の中で、幼児は多くの直接的・具体的な体験を通して心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返しながら、楽しさや不思議さ等の追及をしたり、問題解決に向けて粘り強く取り組んだりしています。

これからもこのような幼児の主体的で深い学びができるよう、教師自身も感性を鋭くし、幼児がより良い環境との出会いができるよう支えていきたいと思っています。



附属特別支援学校における環境教育の取り組み

附属特別支援学校／竹内 圭佑



本校では、小学部から高等部までの各部で環境教育の一環として、野菜や果物の栽培を行っています。

小学部では、プランターや花壇にミニトマト、ナス、キュウリの苗を植えました。みんなで協力して水やりを行い、夏には、たくさんの野菜を収穫することができました。子どもたちが、自分たちで育て、大きく実った野菜を大事そうに手に抱えている姿が印象的でした。

中学部では、春はジャガイモ、冬はダイコンを育てました。収穫時には、ジャガイモやダイコンの茎を力一杯引っ張り、野菜の根の力強さを体感することができました。土の中から野菜が出てくると、子どもたちは歓声を上げ、喜んでいました。

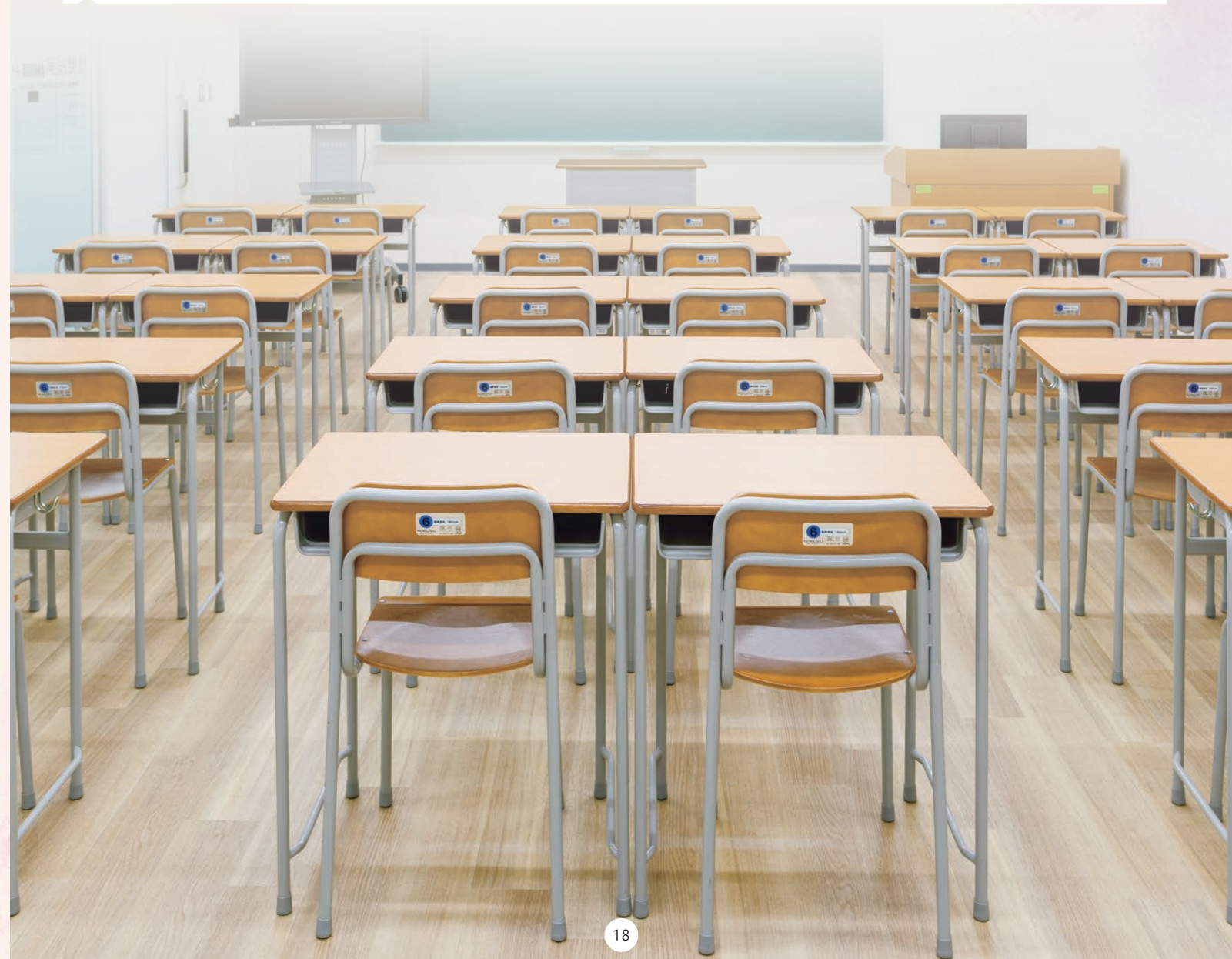
高等部では、作業学習で農園班の生徒が、初夏にはナツミカン、夏にはナス、オクラ、トマト、秋にはカキ、サツマイモ、冬にはダイコン、ユズ、カラタチなどを育てました。収穫後は、保護者や先生方に販売をしました。水やりや草取りを含めた栽培活動を通して、野菜や果物が順調に生育するための大変さと難しさを実感しました。

子どもたちは、自分たちで苗を植え、世話をし、収穫する

活動を通して、野菜が成長していく様子を学んだり、収穫の喜びを味わったりすることができました。今後も、自然とのかかわりを実感できる環境教育を継続させていきたいと考えています。



大きく育つといいな



学生の取組等

課外活動等による環境教育活動及び地域貢献活動について報告をします。



カキツバタ群落の保護活動

かきつばたの民／特別支援学校教員養成課程3年／白崎 祐理子



「かきつばたの民」は、大学と地域を繋ぐためのサークルとして昨年発足した団体です。普段は、地域で行われる行事への参加、下宿生の居場所づくりのためのイベント開催を活動の中心にしています。

今回は、日本三大カキツバタ自生地の一つでもある小堤西池の環境保護活動に参加しました。カキツバタ群落は国の天然記念物にも指定されており、カキツバタに影響を与えないように、除草作業では除草剤を使わないといった配慮がされているようです。学生たちは初めて使う道具を駆使しながら、カキツバタ群落の横にある水路脇に生えている外来種の植物

を取り除くお手伝いをして、生態系保護や生物多様性を守ることに繋がる活動を行うことができました。

さらに、除草作業の最中にはニホンアマガエルやハブなどを発見し、我々の生活圏では見かけることが少なくなってしまった「日本の自然」を感じることもできました。



障害者と一緒にゴミ拾いをして感じたこと

共生のための語り合いサークル「リアル。」
学校教員養成課程特別支援教育専攻2年／山田 紋弓



新型コロナウイルスが流行している状況下においても、障害者と一緒に楽しめるイベントを行う団体として、対面で行えるイベントを考えていたときに、当事者の「普段生活している街を清掃し、地域貢献がしたい」という声を受けて、行われた企画です。刈谷駅周辺で行いました。各チーム指定された別々の目的地に向かい、拾ったゴミに対してポイントがつき、より高得点のポイントを取ったチームが優勝という内容です。この企画を通して感じたことは、2つあります。1つ目は、障害がある＝マイナスではないということです。車椅子の方は目線が低いので学生より先にゴミに気づくことができます。2つ目は、街にはゴミが沢山あり清掃活動することによって達成感が得られるということです。外にゴミ箱が設置されているコンビニエンスストアの周りで多くの缶や瓶が捨てられていたことには驚きました。この企画は、障害者への理解が深まるだけでなく、環境について考える機会と

なりました。参加者からの評判も良かったので、今後も定期的にこの活動を行っていきたいと考えています。



ラグビー部の清掃活動について

初等教育教員養成課程社会専修4年／佐藤 文侍



私たちラグビー部は、毎週水曜日の朝の時間に大学内の清掃活動を行っています。このご時世の中、日々私たちが部として思う存分活動できているこの状況に感謝し、大学内の清掃をすることで少しでも恩返しができればと活動しています。また、大学内のゴミを少しでも多く減らし、自分たちも含む多くの学生が気持ちよく大学生活を送れるように清掃活動を行っています。

清掃活動には校舎内と校舎外の2種類があり、隔週で行っています。校舎内の清掃活動では、学生が授業を受けやすい環境作りを部員一人一人が心掛けており、各教室内を回りながら、机を並べること。机の中に忘れ物がないかを確認すること。床に落ちているゴミを拾うこと。そして見つかった落とし物を大学に届けることをしています。

校舎外の清掃活動では、学年毎に大学内の決められた道を歩き、落ちているゴミを拾っています。傘などの大きなものからペットボトルや空き缶などの小さなものまで、様々なゴミを手分けして拾い、筆記用具やファ



留学生が考えるゴミ問題について

国際企画課／北 絵理子



2021年度に愛知教育大学で学んでいる外国人留学生は36名在籍していました。彼らは寮での生活における、ゴミの分別やキャンパスクリーンデイ2021への参加を通して、ゴミ問題について考える機会が度々あったそうです。なかでもインドネシアから来ている2名の教員研修留学生（母国で教員として勤務しており、日本型教育について学ぶ為に留学している留学生）にとっては、日本人学生とともに過ごすことで「母国での習慣との違い」や「見習うべき習慣（ゴミの分別、リサイクル等）」などに気づく事が多くあったそうです。インドネシアでは生活の中で日常的に路上へゴミをポイ捨てしている為、問題が多くあることを話してくれました。また、母国へ戻ってから日本で経験したことを生徒たちに話すことは重要だと考えているそうです。

後日、彼らは刈谷市の「国際化・多文化共生推進計画」事業であるワールドスタディ講座の講師として刈谷市内の小学校で国際理解、ESD（持続可能な開発のための教育）、SDGs（国連持続可能な開発目標）の学びの場へ参加することになりました。

授業では講師として「世界と日本をつなぐ役割」を担いながら参加する生徒にレクチャーを行いました。中でも「ゴミ問題」についてふれ、生徒同士のグループワークの中でも「インドネシアと日本のゴミ問題」について話し合ってもらっていました。日本の小学生と一緒にインドネシアと日本との相違点や共通点を知り、理解してもらうことで、これ

からどのような社会を築いていくべきなのか考える機会を得られたことは大きな実りだったと話してくれました。

2022年度も留学生とともに持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のための取り組みを進めようと考えております。



段ボール回収

寮生は、段ボールを寮内の一つの部屋に一時的に保管し、毎月第4日曜日に実施されている地域自治会の資源回収や近くの中学校に回収してもらっています。

一般家庭では、回収場所に持っていったり、古紙回収業者に頼んだりしないといけないが私たちの寮では、毎月決まった曜日と時間に回収しに来てもらえるので確実に段ボールの資源回収を実施しています。

また、現在 180 名近くの寮生が暮らしているため、最近では宅配を使用している人も多く、段ボールの量も必然的に多くなります。多い時は、回収トラック3台分にも及び毎回往復してもらっています。

現在、段ボールのリサイクル率は95%を超え、再利用するプラスチック系の包装容器とは異なり、回収、洗浄、破損、紛失などに伴う二酸化炭素排出量がなく、総合的にみると二酸化炭素排出量が少ない環境負荷が低い包装資材です。また、木からできており太陽光発電と同じくクリーンで持続可能な

愛知教育大学学生寮 寮長 / 桜井 俊輔



包装資材でもあります。

リサイクルされた段ボールは、緩衝性や商品固定性、保温(冷)性があり汎用性が高く、中身や用途に応じて設計され、さまざまな分野で輸送包装の主役として幅広く活躍することができます。

また、SDGsのゴールにも関係しており、リサイクル性の高さや製造時に有害な化学物質を使用しないことで12「つくる責任、つかう責任」を、海洋汚染問題があるプラスチックの代替をすることで14「海の豊かさを守ろう」を、森林などの陸域生態系をはじめとした陸の豊かさを守り、多様な生物が生きられるようにすることで15「陸の豊かさを守ろう」といった3つのゴールに貢献していきます。

これからも段ボール資源回収によって、環境にやさしいリサイクルができるように協力するとともに寮生全員が環境保護に意識を高めるとともに、積極的に利用してSDGsに貢献し、もっと良い環境生活にしていきたいです。

生協学生委員会「社会組」の環境への取り組みについて

愛知教育大学生協学生委員会 (GI)



生協学生委員会では「環境組」改め、“社会問題や平和・環境問題”について考える「社会組」を設置し、理想に近づけるよう、現状に合わせて活動を行っています。

主に「ミンミリパック」の回収を行っています。ミンミリパックは回収率の低さを課題としています。特に一昨年度と昨年度に入学した学生は大学に登校する機会が非常に少なく、生協eM店での生協手作り丼の販売が中止していたこともあり、ミンミリパックの存在を知らない組合員も多くいます。

しかし、今は生協手作り丼の販売が再開していますので、ポスターを掲示するなどして、ミンミリパックの回収箱が設置してある場所を周知する取り組みを始めています。



私たちが手作りした回収箱を学内に設置しています



生協eM店や第一共通棟などにポスターを掲示しています

学生主体で廃棄物減量へ

私たち学生自治会は、従来からクラブ、サークル、委員会などの課外活動団体の支援活動を多角的に展開してきました。その一環として、各団体の活動で発生する廃棄物を回収する事業も長らく行ってまいりました。

しかし近年、限りある資源を活かし持続可能な社会の形成が求められる中で、従来通りに廃棄物の投棄を認めるままではいけないという意見が上がりました。この意見を受けて、学生自治会として学生生活の向上と社会へのコミットの両立を議論し、2つの新規の取り組みを行いました。

1つ目が排出者責任を明確化する登録制の導入です。事前に廃棄する物品と団体名をWebフォームで登録してもらい、

愛知教育大学学生自治会 / 永用 尚也



誰がどれだけ捨てるのかを管理する仕組みを導入しました。確認した廃棄物については原則団体側で解体・分別をしてもらい、廃棄する際に提供することを目指しました。

2つ目が、不用品を他の個人や団体に譲渡する「フリーマーケット」の開催です。毎年多くの家具が投棄されることから、それらを有効に活用できる方に譲渡できる環境を整備する取り組みを実施しました。

2つの新施策を実行していく中で課題も多く見つかりました。しかし今回の挑戦に学び、今後も愛知教育大学学生自治会は教育のデジタルトランスフォーメーション(EDX)を加速させる事業を順次打ち出していきます。

AICHIの子どもたちにSDGsを

私たちは2020年度から、愛知教育大学 学生団体 SAGA(サーガ)として、持続可能な開発目標である「SDGs」の普及・啓発活動に取り組んでいます。これまで、私たち自身のSDGs理解の深化と子どもたちへのSDGs普及・啓発のために、教材の開発や出前授業・環境イベント等への参加など、精力的に活動してきました。特に昨年度は、学校への出前授業や企業が主催するイベントへの出展など、たくさんの活動の機会に恵まれました。

出前授業では、愛知県内の小中学校3校を訪問しました。授業では私たちが開発した教材「SDGs まちづくり」や「SDGs かるた」を活用し、様々な建物とSDGsのつながりや、SDGsそのものの学びを体験してもらいました。子どもたちは、楽しみながら教材を体験しており、ワークシートの振り返りでは、SDGsについてしっかり学べている様子が見られました。

また、イベント出展では、イベントに来場されたお客様に、出前授業で用いた2つの教材に加えて、神経衰弱を楽しみながら生物模倣を学ぶことができる「バイオミミクリー」や、生態系について学ぶことができる「生態系8並べ」も体験していただきました。親子で参加してくださった方や、同じイベントに出展していた企業の方などから、教材について「おもしろい!」「よくできているね!」という大変ありがたいお言葉をたくさんいただきました。

これらの活動を通して、子どもたちにSDGsを伝えるにはどのようにしたら効果的なのか、実践的に学ぶことができました。今後も、未来の地球を背負っていく子どもたちにSDGsの大切さを伝え、持続可能な社会の担い手の育成を推進していきたいと考えています。

学生団体SAGA / 川富 彩音
(※ パートナースhip団体認定)



かがやけ☆あいちサスティナ研究所の活動を通して

かがやけ☆あいちサスティナ研究所第7期生／上野 光・清水 咲良・田中 瑞基・日比野 愛生・真砂 晃希

第7回かがやけ☆あいちサスティナ研究所に研究員として参加しました。今回は、本学から6名の学生が、中京テレビ放送株式会社、株式会社コメダの研究員として、企業が提案する環境問題の解決に向けて約半年間活動しました。

個人参加部門の研究員は、株式会社コメダの方から頂いた「お客様がコメダでくつろぎながら、環境や社会に貢献できる商品やサービスを提案せよ」という課題に、他大学の学生と共に取り組みました。昨今、重要視されている「脱プラ」を軸に、これからの担う私達若者が主体で楽しく持続できるという観点から、おしゃれにピクニックする「おしゃピク」を提案しました。また、株式会社コメダの強みであり、課題でもある「くつろぎ」を店内だけでなく、店外まで広げようという新たな試みでもありました。提案に至るまでには、チーム内での意見の違い、企業側とのすり合わせ等、様々な難題に直面しましたが、個人参加部門の強みである各人の背景・考え方の違いを活かして、乗り越えることができました。この活動を通して、『『くつろぎ』と『環境』の両立』の難しさを実感しました。

団体参加部門の研究員は、中京テレビ株式会社の方から頂いた



「SDGsをテーマに、視聴者に訴えかけるネットと連動したテレビ番組を企画せよ」という課題に取り組みました。

そこで、「誰にとっても分かりやすく、SDGsを考えたい」を追究し、一人一人が考えた案の良い要素を組み合わせ、視聴者参加型のアニメ番組を企画しました。その結果、教育大学の強みを生かした、「学校生活をアニメ化し、すべての人にSDGsを～学校はSDGs17のゴールすべてとつながっている～」という解決策に至りました。この活動を通して、「多くの人にSDGsを認知してもらうこと」「視聴者の心に訴えかけること」の難しさを実感しました。

今回の経験を生かし、今後の学生生活を充実したものにしていきたいです。

2022年度の生協店舗・食堂での環境配慮の取り組みについて

愛知教育大学生協同組合



生協では、組合員の皆さんに食堂や店舗をご利用いただく中でも、環境に配慮した消費に参加できる仕組みづくりに取り組んでいます。

既に定着している主な活動は、レジ袋削減です。生協は、刈谷市のごみ減量化推進会議とともに「刈谷市におけるレジ袋削減に関する協定」を提携しており、購買店舗でのレジ袋配布は原則行っておらず、必要な方には有料（1枚5円）で購入いただいています。生協への声カードに「レジ袋を置いてほしい」という声をいただくこともあります。レジ袋削減の目的で有料化していることをご説明し、環境配慮への理解、ご協力をいただけるよう回答しています。令和3年度のレジ袋購入者は1年間の来店数約19万6千人中、1,630人で、レジ袋辞退率は、99.2%となっています。

もう一つの日常活動は、購買コンビニで販売する井パックの回収です。購買コンビニで販売する井には、「ミンミ・リ・リパック」（通称 ミンミリパック）という再生・再資源化が可能な容器を採用し、リサイクル、省資源化に役立てています。令和3年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、利用が大きく減少しておりますが、生協学生委員会も「生協フェスタ」の機会などを利用してミンミリパックの



ミンミリパックのリサイクル方法を示すポスター



食廃油からBDFを抽出

回収を呼び掛けるなど、引き続き回収に努めています。

大学生協では、毎年「全国環境セミナー」を開催しており、全国の大学生協組合員の環境活動への取り組みを学び合っています。愛教大生協からも毎年、学生委員会から代表参加者を派遣し、学内での環境活動へのヒントに役立てています。

生協の日常の店舗運営でも、省資源、リサイクルの取り組みを行っています。食堂で出る廃食は回収してリサイクルしています。廃食油はバイオディーゼルエンジンの燃料（BDF）としてリサイクルされ、トラックなどの燃料として利用されます。また学内の店舗や自動販売機で利用、排出されたペットボトルは、生協が回収し、リサイクルに活用していますが、その費用（環境協力金）は生協が負担しています。



2

サスティナブルキャンパスを 目指して



温室効果ガスCO₂抑制状況

本学の温室効果ガス CO₂ 排出量の抑制状況について報告をします。
本学では、省エネルギー機器の導入や啓発活動等により、中長期的に温室効果ガス CO₂ 排出量が減少傾向にあります。



温室効果ガスCO₂排出量の推移（過去6年間）

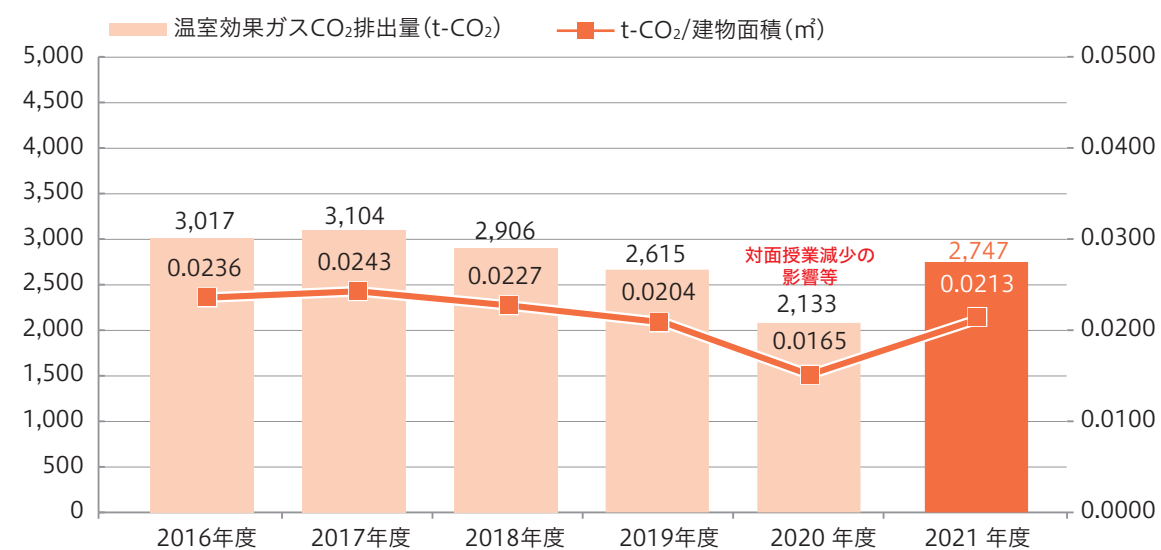


図 温室効果ガスCO₂排出量の推移（過去6年間）

温室効果ガス CO₂ 排出量の6年間（中期）の推移としては、減少傾向にあります。
2020年度は、遠隔授業の拡大（コロナウイルス感染症対策）等により、対面授業が減少し、大学設備の利用が減少したため、大きく温室効果ガス CO₂ 排出量が、削減しました。
2021年度は、通常授業化等により増加に転じましたが、第3期中期目標・中期計画の目標値（2015年度比－6％）と比較した場合、温室効果ガス CO₂ 排出量を15.9％削減することができました。



温室効果ガスCO₂排出量の低減対策

○省エネ機器導入

改修工事においても、積極的に省エネ機器を導入し、温室効果ガス CO₂ 排出量の抑制に取り組んでいます。

●大規模改修工事



教育・人文棟（2019年5月完成）



自然科学棟（2021年6月完成）



美術・技術・家政棟（2022年1月完成）



養護・幼児棟（2022年3月完成）



保健体育棟（2022年3月完成）

省エネ対策：【全室LED化】【全室高効率空調】【建物の断熱化】等
改修効果：改修前の建物と比べ、約10～20％節電見込み

●省エネ機器改修工事

改修建物：【第一共通棟】等
省エネ対策：【全室LED化】【高効率空調化】等
改修効果：改修前の照明設備から約50％節電見込み
改修前の空調設備から約15％節ガス見込み



全室LED化



高効率空調への更新



太陽光発電の導入

○啓発活動

トイレや流し台の人目のつく場所に、省エネに関する取組や豆知識を「省エネニュース」として掲示し、省エネルギーを呼びかけています。



マテリアルバランス（環境負荷状況）

本学の事業活動（教育・研究・課外活動等）に必要な資源・エネルギー（INPUT）と廃棄・排出量（OUTPUT）との関係について報告をします。



マテリアルバランス



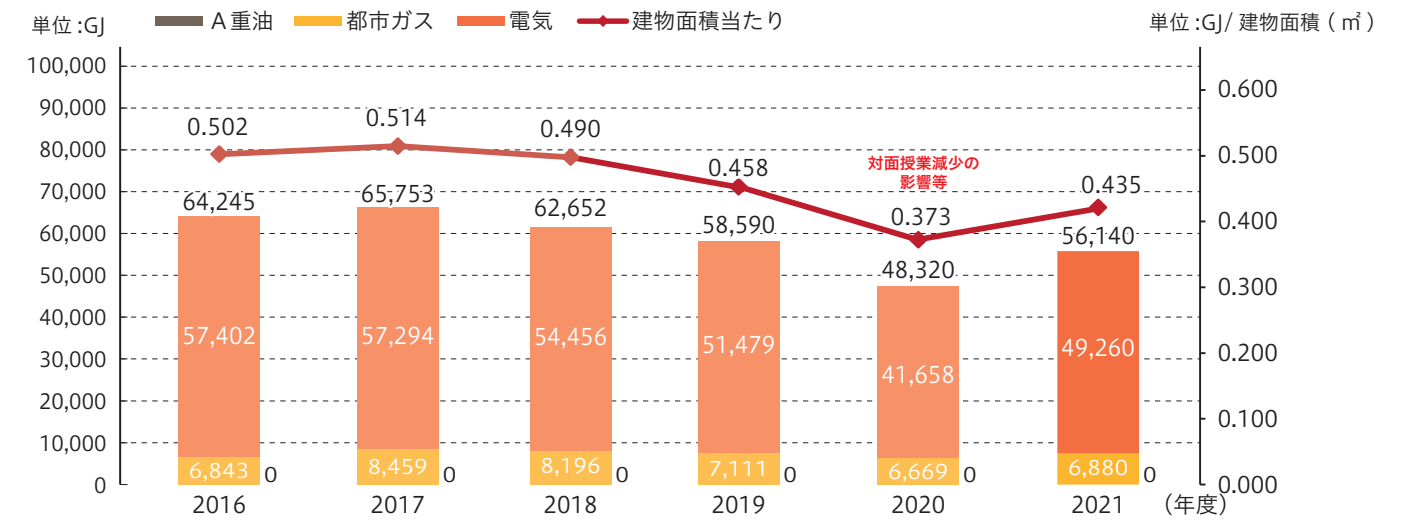
総エネルギー投入量の抑制

本学が、主に事業活動（教育・研究・課外活動等）で使用しているエネルギーは、電力・都市ガスになります。これらのエネルギー投入量について報告します。

本学では、省エネルギー機器の導入や啓発活動により、エネルギー投入量が、年々減少傾向にあります。



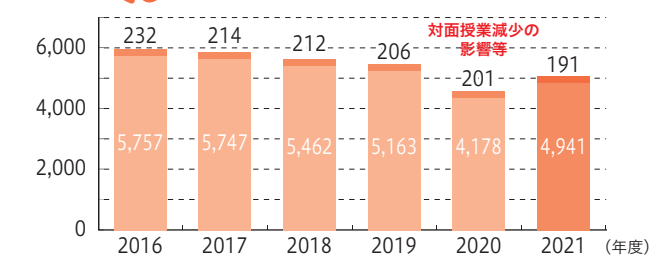
総エネルギー投入量の推移（過去6年間）



単位
千kWh



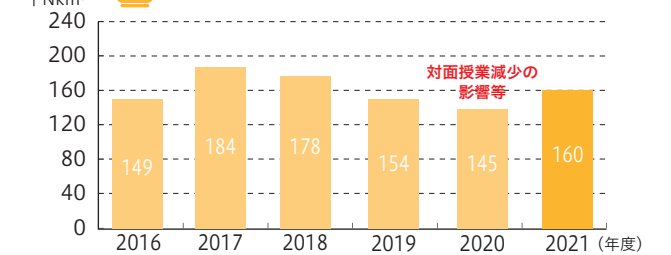
電気使用量



単位
千Nm³



都市ガス使用量



太陽光発電
191 千 kWh

5,132 千 kWh の内 191 千 kWh は太陽光発電による自然エネルギーです。

2015 年教育交流館に太陽光発電 10kW を設置

2014 年教育未来館に太陽光発電 10kW を設置

2013 年本部棟に太陽光発電 12.5kW を設置



総エネルギー投入量の低減対策

- 省エネルギー型機器の導入
- 昼休みのパソコン電源オフ、帰宅時のプリンター等電源オフ・電源スイッチ付コンセントの利用
- 夏季における「クールビズ」、冬季における「ウォームビズ」の励行
- 冷暖房中の窓、出入口の開放禁止
- ブラインドやカーテンの利用
- エアコンフィルターの清掃
- 発熱の大きいOA機器類の配置の工夫
- 暖房便座のふた閉めの徹底、非暖房期には便座への通電は行わない
- 木曜日の定時退庁・業務効率化による残業の削減
- 昼休み・夜間・休日は、業務上必要最小限の範囲を除き消灯
- 職員に対する階段利用の奨励
- 冷蔵する物品の量を適切な範囲にとどめる
- 省CO₂化の要素を考慮した使用電力購入
- 夏季一斉休業

グリーン調達の推進状況

本学では、環境物品等の調達等に関する法律（グリーン調達法）に基づき、環境配慮をした物品の調達に努めています。



💡 グリーン調達状況

○グリーン調達の目標

環境物品等の調達の推進等に関する法律（グリーン購入法）に基づき、環境負荷の低減に資する製品等の調達の推進を図るための方針を策定し、調達率 100 パーセントを目標としています。

○グリーン調達の状況

本学のグリーン購入法による環境負荷低減の製品・サービスなど（特定調達品目）は、21 分野 280 品目となり、主な分野の調達量・達成率は、以下のとおりです。達成率は、すべて 100 パーセントになりました。今後もグリーン調達を推進していきます。



○グリーン調達の実績（主要品目抜粋）

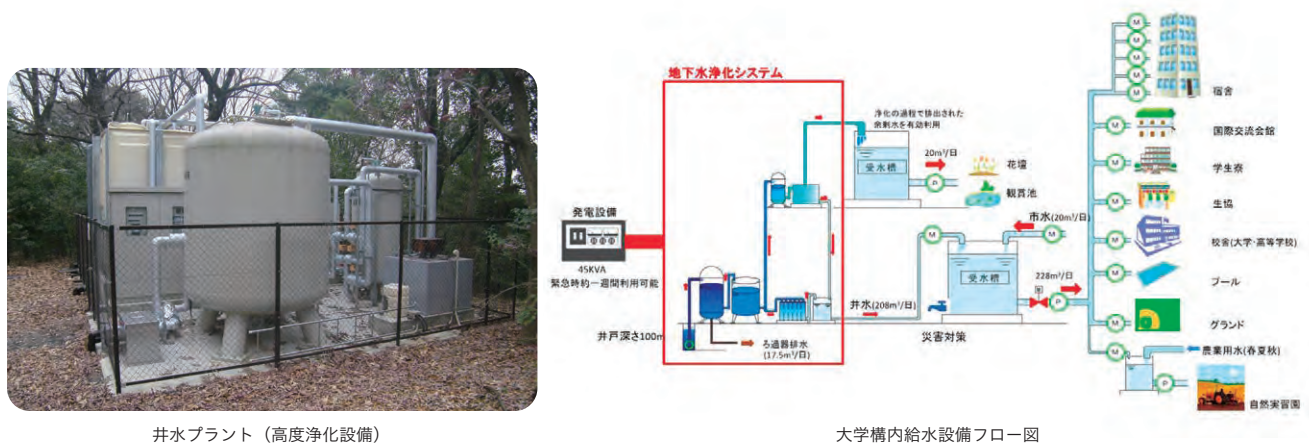
分野		品目	全調達量	特定調達品目調達量	調達率
紙 類		コピー用紙	21,266.6 kg	21,266.6 kg	100%
		トイレットペーパー	2,104.9 kg	2,104.9 kg	100%
文書類		ファイル	12,857 冊	12,857 冊	100%
		事務用封筒（紙製）	17,379 枚	17,379 枚	100%
オフィス家具等		いす	2,138 脚	2,138 脚	100%
		机	1,075 台	1,075 台	100%
OA 機器		パーソナルコンピュータ	425 台	425 台	100%
		スキャナ	26 台	26 台	100%
照 明		LED照明器具	2,080 台	2,080 台	100%
		電球形状のランプ	4 本	4 本	100%
インテリア・寝装寝具		カーテン	72 枚	72 枚	100%
役 務		印刷	39 件	39 件	100%

水資源投入量の抑制

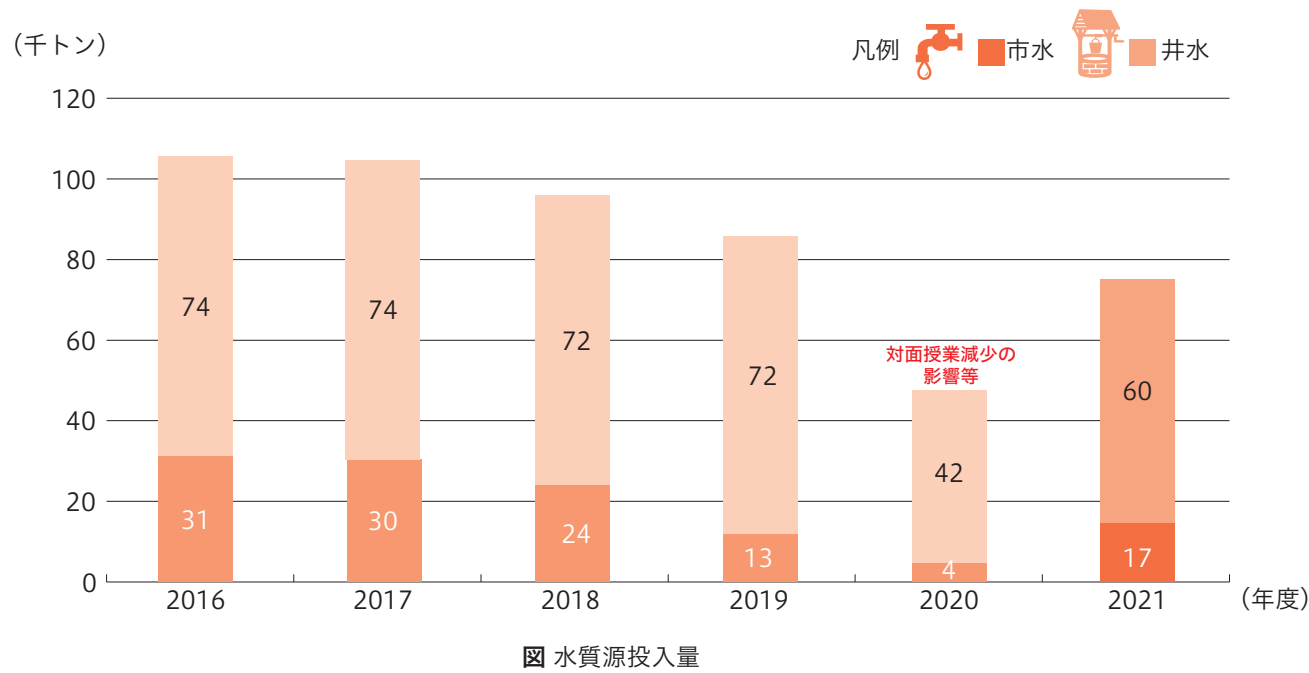
本学では、構内に井水プラント（高度浄化設備）を取り入れており、送水による電力を抑えた飲料水を供給しています。



本学では、市からの給水に加え、2011 年度より構内に深井戸（地下 100 m 程度）を掘り、その水を高度に浄化し飲料水とする井水プラントを整備しました。
なお、浄化の過程で、排水される水についても、構内 2 カ所の鑑賞池に放流するなどして、有効活用をしています。



💡 水資源投入量の推移（過去6年間）



本学の給水使用量は、トイレ等の節水工事や啓発活動、漏水監視により、年々減少傾向にあります。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症防止対策による遠隔授業等の影響で、一時的に減少しました。

廃棄物排出の抑制

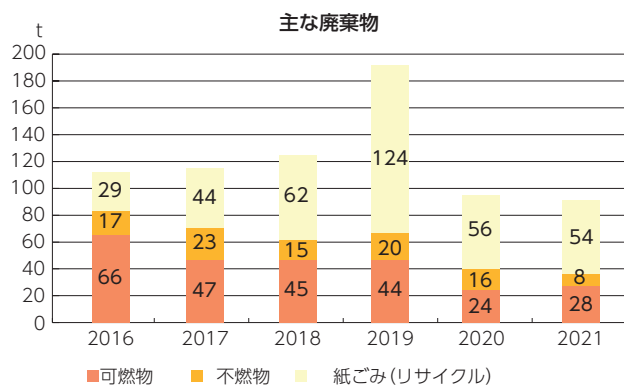
本学では、廃棄物排出抑制に努めています。廃棄物排出量の推移について報告をします。

発生抑制（リデュース）、製品及び部品の再利用（リユース）、再生利用（マテリアルリサイクル）、熱回収（サーマルリサイクル）を基本方針として、紙ごみ、ペットボトル、カン類及びビン類、蛍光灯のリサイクルや、粗大ごみのリユースに努めています。



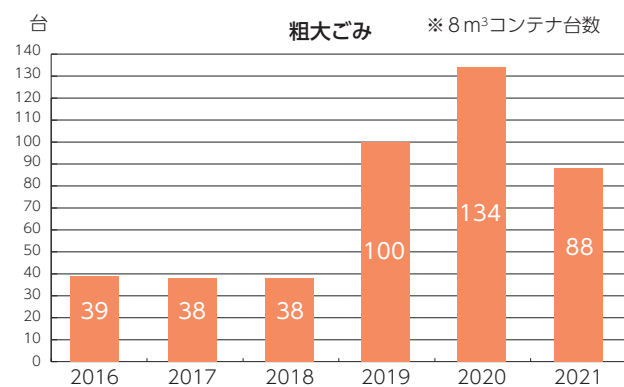
廃棄物排出量の推移（過去6年間）

〇ごみ排出量

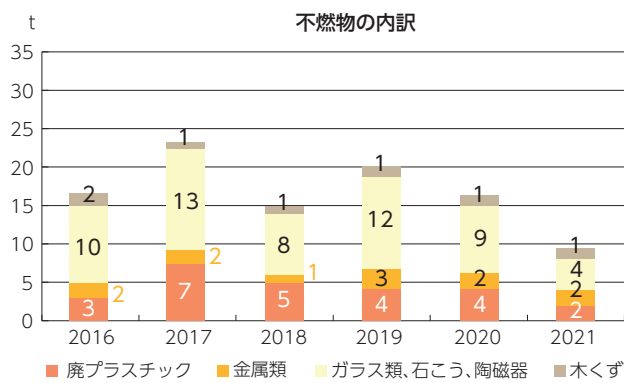


可燃・不燃物の排出量は、建物の大型改修工事に伴う引越作業により増減しますが、リサイクルできる紙ごみを分別したことにより、減少傾向になっています。

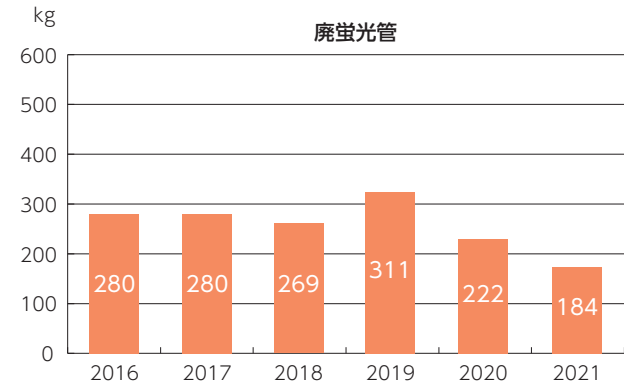
また、紙ごみの排出量については、増加する年度もありますが、リサイクルをすることで対応しています。



粗大ごみの排出量は、建物の大型改修工事に伴う引越作業量により増減しますが、倉庫に一時保管しリユースを促すため、年ごとの排出量にばらつきが生じています。



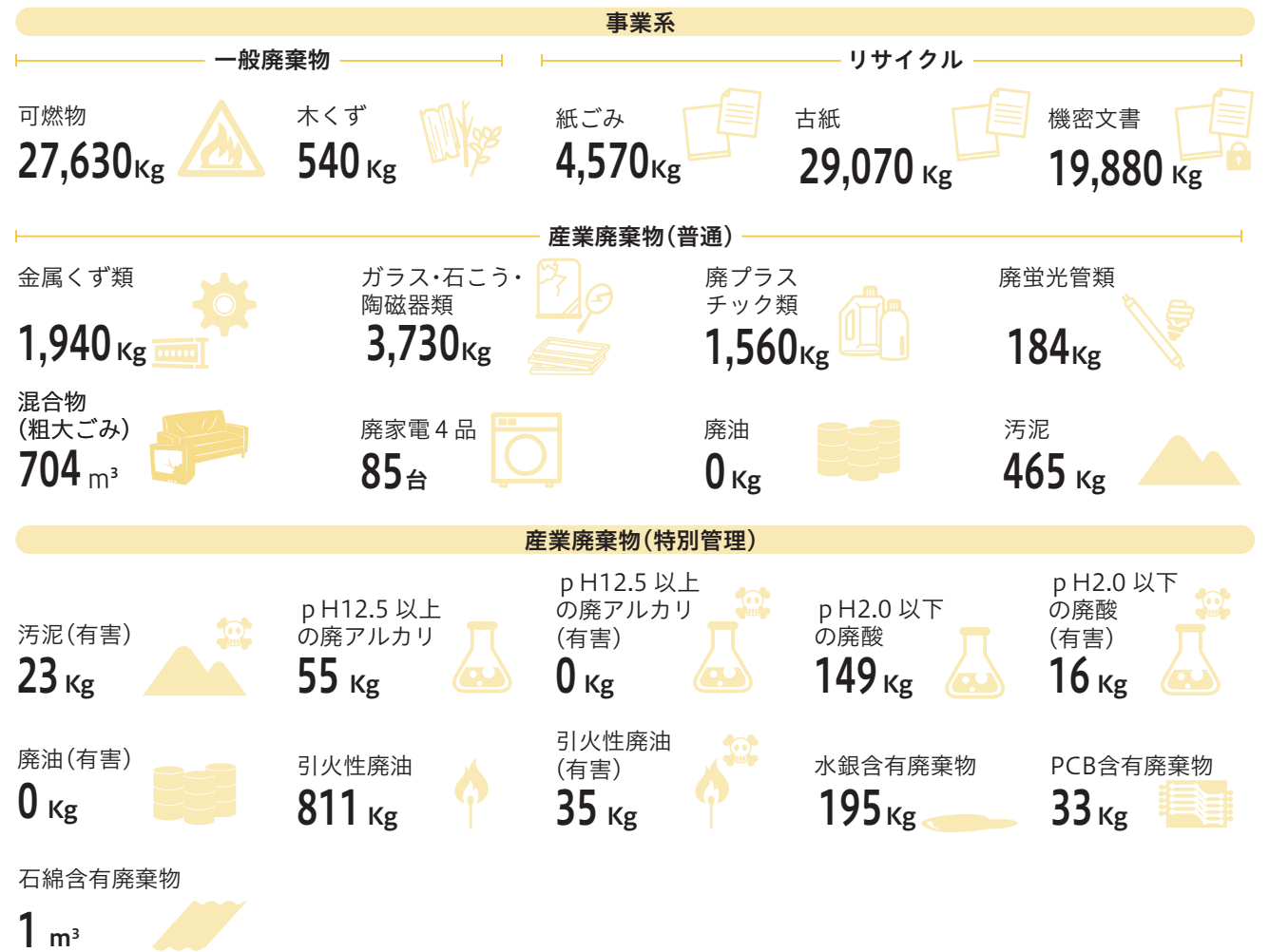
自然科学系・美術系・技術系の教育研究活動のため、金属くず、ガラスくず、木くず等が比較的多く排出します。これらを分別したうえ、最終的に金属原料、ガラス原料等になり、木くずは製紙原料や補助燃料として活用されています。



廃蛍光灯の排出量は、蛍光灯の寿命に大きく影響されます。蛍光灯の寿命は約4～5年であり、廃蛍光灯の排出量もそのサイクルで増減します。LED照明に移行しているため、年々排出量は減少傾向にあります。

廃棄物の内訳

〇大学からの廃棄物（2021年度）



※廃棄物は分別回収を行い、ごみの減量化対策を行っています、またマニフェストにより適切に管理をしています。
※廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行令第二条の五に示す特定有害産業廃棄物にあたる場合は(有害)としています。

〇低減対策等

発生抑制（リデュース）、製品及び部品の再利用（リユース）、再生利用（マテリアルリサイクル）、熱回収（サーマルリサイクル）を基本的な方針として対策を行っています。主な対策事例として下記の様な取り組みを行っています。

- ①紙ごみについては、古紙（売り払い）、雑古紙、機密文書・廃棄図書の種類に区分し、紙の状況及び性質に応じて排出リサイクルされます。また、学内において紙媒体にプリントアウトする場合は、両面印刷、集約印刷及び裏紙使用を推進し省資源化に努めています。
- ②ペットボトル、カン類及びビン類は、リサイクルのために分別したうえで排出しています。
- ③粗大ゴミは排出前に倉庫に一時保管し、物の状態に応じてリユースをしています。また廃棄物の適切な処理の促進に関する条例（愛知県）に基づき、法律遵守の観点から排出者の義務として、適宜、処分場において実地確認をしています。
- ④廃棄する蛍光灯類は一カ所に集積したうえで排出し、最終的に水銀、ガラス原料としてリサイクルされます。

水質汚濁防止の取組状況

本学の排水は、関連法令（水質汚濁防止法・下水道法）及び自治体が定める水質基準に準じて、適切に管理をしています。排水管理状況について報告します。

○排水管理

本学の排水は、雨水系と排水系（汚水・雑排水・実験排水）に区別され、排水されます。実験排水を使用される主な建物において、中和処理設備や PH 監視装置を整備し、常時管理をしています。

メインキャンパス（刈谷地区）の排水は、2016 年 6 月まで構内の排水処理施設で浄化した後、河川へ放流していましたが、施設の老朽化により 2016 年 7 月からは、公共下水道に接続し、排水しています。



中和処理施設（pH 常時監視）により実験系排水を管理

○排水管の改修工事

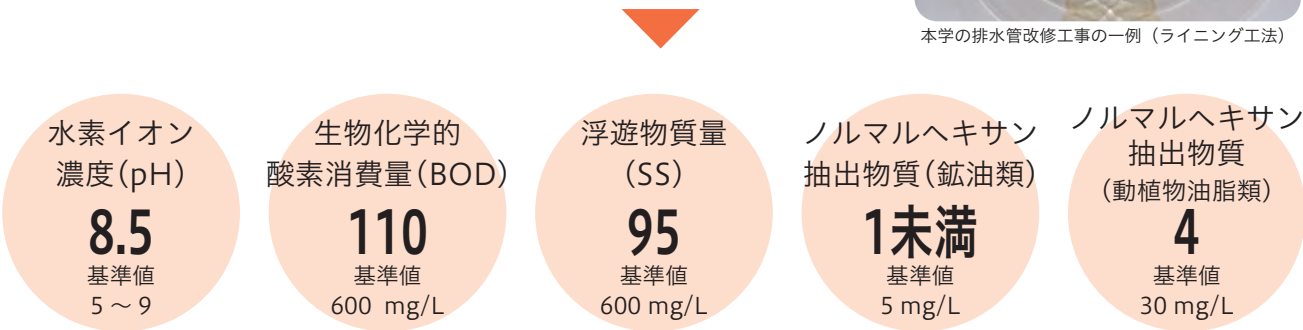
老朽化による排水管の破損等により土中への排水漏れが発生しており、2015 年度より排水管のリニューアル工事を行っています。



本学の排水管改修工事の一例（ライニング工法）

○排水（水質汚濁物質）の分析結果

2021 年度の水質測定結果（一部抜粋）は、以下のとおりとなります。基準値の超過は、ありませんでした。



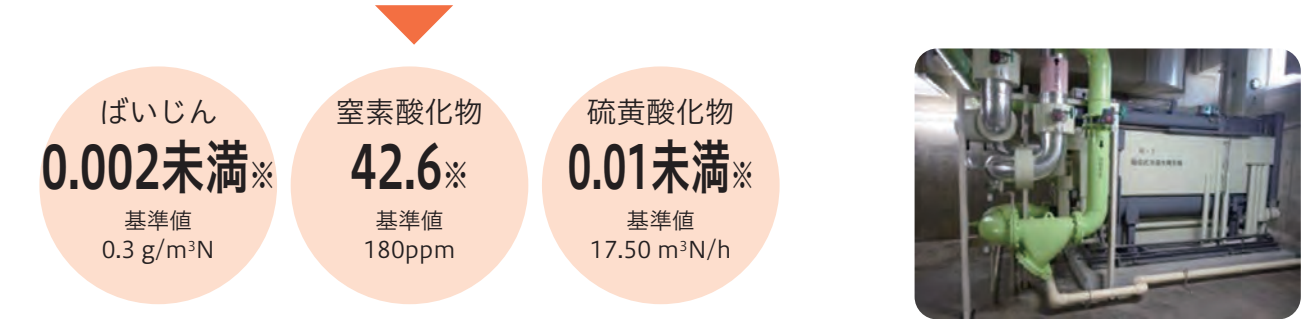
大気汚染防止の取組状況

本学の大気汚染物質の排出は、関連法令（大気汚染防止法）が定める排出基準に準じて、適切に管理をしています。本学の大気汚染排出状況について報告をします。

○大気汚染物質排出管理

本学では、関連法令に該当する設備として、講堂と第一福利施設の大型空調設備（冷温水発生機）となりますが、定期的に測定・分析（ばい煙）を行い、適切に管理をしています。

大学キャンパス（刈谷地区）の空調設備は、ボイラー設備によるセントラル式暖房をしており、多くのばい煙を排出していましたが、2015 年度に個別空調設備（エアコン）に移行することで、ばい煙発生を抑制することができました。



※本学のばいじん、窒素酸化物、硫黄酸化物は、計測値



冷温水発生機（講堂）

化学物質取扱及び管理状況

本学の化学物質は、主に実験実習や研究用で使用しています。関連法令（毒物・劇物取扱法・PRTR 法・労働安全衛生法・消防法・廃棄物の処理及び清掃に関する法律・水質汚濁防止法）にしたがい、適切に管理・処分をしています。化学物質の取扱及び管理状況について報告をします。

愛知教育大学では、毒物及び劇物取締法、PRTR 法、労働安全衛生法、消防法、廃棄物の処理および清掃に関する法律、および水質汚濁防止法について対象とした化学物質管理規程に基づき、環境リスク・安全リスク・健康リスク低減を目指した化学物質管理を行っています。化学物質管理規程に基づき、化学物質管理支援システム TULIP を活用しています。化学物質管理に関わる業務担当についてマニュアル化を図り、各研究室の適正管理を支援推進しています。2021 年度は、新型コロナウイルス感染症対策として消毒用エタノール（80%程度）が約 2000L 使われましたが、2020 年度から始まった自然科学系実験棟の改修工事の影響も加わり、化学物質を取り扱う教育研究活動に自粛傾向が見られました。また、引越し作業に伴う試薬等の棚卸や整理整頓が進み、大量の化学物質が廃棄処分されました。本頁では、2021 年度の取扱量（消毒用エタノールは除く）の多かった上位 5 物質について、過去 5 年間の学内取扱量とともに掲載しました。

表 化学物質取扱及び管理状況 (kg)									
名称	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	労働安全衛生法	消防法	毒物及び劇物取締法
メタノール	198	198	218	127	11	61	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき物質	第四類危険物 アルコール類水溶性液体	劇物
クロロホルム	80	119	176	81	7	54	特定第二類物質 特別管理物質 特別有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第 9 条貯蔵の届出を要する	劇物
酢酸エチル	81	108	153	58	5	53	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき物質	第四類危険物 第一石油類非水溶性液体	劇物
エタノール	57	48	20	16	31	46	名称を通知すべき有害物	第四類物質 アルコール類水溶性液体	
n-ヘキサン	126	149	102	63	2	38	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第四類危険物 第一石油類非水溶性液体	—

PCB 含有廃棄物の管理状況

本学の PCB 含有廃棄物は、主に電気設備や実験機器内で使用されており、関連法令（ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法）にしたがい、適切に管理・処分をしています。PCB 含有廃棄物の管理状況について報告をします。

高濃度 PCB 含有汚染物は、2022 年度までの処分とされており、本学では、該当する電気設備（変圧器・コンデンサー）について 2021 年度に処分を行いました。
低濃度 PCB 含有汚染物については、2027 年度までの処分とされており、発見次第適切に処分を行います。

水銀含有廃棄物の管理状況

本学の水銀含有廃棄物は、主に電気設備（蛍光灯）や実験機器内（温度計・気圧計）、実習用品（顔料）で使用されており、関連法令（廃棄物処理法）にしたがい、適切に処分をしています。本学の水銀含有廃棄物の管理状況について報告をします。

2021 年度は、195kg の水銀含有廃棄物を適切に処分を行いました。

美化活動

花プロジェクトやキャンパスクリーンディなど、キャンパスの美化活動について報告をします。

花プロジェクト

美化活動の一環で、教職員と学生による花壇の花の植え替えを行っています。

「花プロジェクト」は2012年1月から、大学構内の環境美化の一環として取り組み始めた活動で、今回で第21回となります。当日は野田学長をはじめ、副学長や有志の学生の皆様にもご参加いただき、快晴のなか総勢約60名の参加となりました。会話を控える等の感染症対策を意識しながらも、楽しく構内にある花壇の植栽を行いました。

今回植えた花苗はサルビア、マリーゴールド、ペゴニアの3種類を約700株で、植え終わった後は紫や黄色、赤、白、ピンクの花が並ぶ、夏らしい彩り豊かな花壇となりました。

7月24日、25日のオープンキャンパスでは花いっぱいキャンパスで皆さまをお出迎えすることができました。



AUEスクエアのサルビアとマリーゴールド



学長・副学長と学生によるペゴニアの植栽



第二福利施設の植栽の様子

キャンパスクリーンディ

美化活動の一環で、全学的に教職員と学生が参加する清掃を行っています。

本学では、学内環境の向上と地域連携・社会貢献を目指した活動として教職員・学生ひとりひとりの環境美化に対する意識の高揚と、きれいなキャンパスを維持するために学内一斉清掃「キャンパスクリーンディ」を7月16日(金)に実施しました。

7月24日、25日のオープンキャンパスに来場する高校生たちをきれいなキャンパスで迎えたいと、手分けして、大学構内の草抜き、落ち葉・ゴミ拾い、花壇の草抜きにあたりきれいにすることができました。



バス停の草抜きの様子

その他の活動

教職員が、教育や研究を進めるうえで基盤になる、安心・安全な職場づくりの取組について報告をします。

労働安全衛生

教職員が、安全で健康に働ける職場づくりは、充実した教育・研究活動の基礎です。本学は、教職員が快適に安全に働くことができる大学づくりを目指して、衛生管理者養成、健康診断、ストレスチェック、喫煙、メンタルヘルス、職場巡視、作業環境測定、労働災害率に関する改善等に取り組むために労働安全衛生活動計画を策定しました。

また、本学における労働災害発生状況の推移は表のとおりで、2021年度の労働災害は、休業災害0、不労災害5人で、労働災害度率は3.79、強度率は0でした。2021年度の全産業の度率(不労災害も含む)は、2.09、強度率は0.09で、本学は、強度率は全産業より低値という結果となりました。災害発生について原因を調べ、再発予防措置を講じ、災害発生数の減少を目指します。

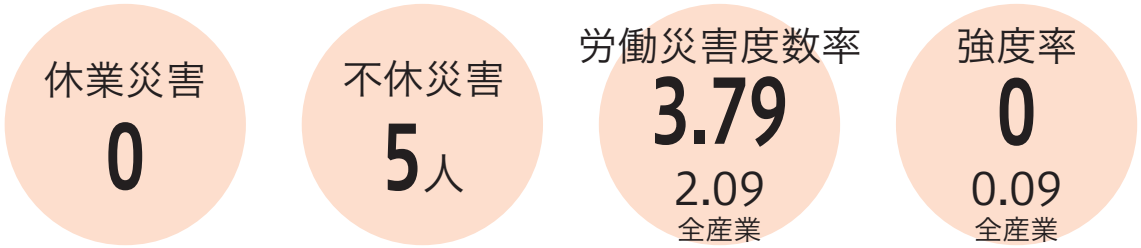


表 労働災害発生状況	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度
休業災害	0	0	0	0	0	0
不労災害	7人	5人	5人	5人	7人	5人
災害合計	7人	5人	5人	5人	7人	5人
労働災害度率(※)	5.30	3.79	3.79	3.79	5.30	3.79
労働災害強度率(※※)	0	0	0	0	0	0

(注) ※は百万延べ労働時間当りの労災人数。※※は千延べ労働時間当りの労災休業延べ日数

人権及び雇用

ハラスメント規程を定め、人権侵害に関する相談窓口を設けて、担当者が相談を受けています。2021年度の相談は1件、ハラスメント防止委員会での審議は0件であり、関係者の処分は0件でした。障害者の雇用は常勤5人、非常勤5人で、能力を活かした就労ができるように積極的に進めています。

環境配慮の仕組み

本学の環境保全の推進体制について報告をします。



推進体制



本学では、環境保全の責任者（学長）を配置し、事務局及び委員会にて実務を進め、実行力ある体制づくりで環境保全にあたっています。



法令遵守状況

法 令		大学の体制・規程等	大学の具体的な対応（例）
【環 境】	・環境配慮促進法 ・環境配慮契約法 ・地球温暖化対策の推進に関する法律 ・エネルギーの使用の合理化等に関する法律 ・グリーン購入法	エネルギーの使用の合理化に関する規程	・環境報告書の作成・公表 ・環境活動の実施
【水 質】	・水質汚濁防止法 ・下水道法	水質汚濁防止規則 化学物質管理委員会規程	・毎週・窒素及びリンの測定（井ヶ谷地区） ・BOD 毎月測定
【大 気】	・大気汚染防止法		・ばい煙測定（Nox・Sox・ばい煙等）
【騒音・振動】	・騒音・振動規制法		・冷凍機等設備（送風機）の届出 ・建設工事時に低騒音型重機の使用
【廃棄物】	・廃棄物の処理及び清掃に関する法律 ・ダイオキシン特定処置法 ・ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法	化学物質の廃棄物処理規則 化学物質の廃棄物処理細則 化学物質管理委員会規程	・特定管理産業廃棄物管理責任者の選任 ・産業廃棄物・特定管理産業廃棄物のマニフェスト管理及び報告 ・PCBの適正保管及び適正処分 ・処理業者の調査票を作成し適正業者の選定 ・処理施設の現地調査実施 ・ごみ分別の徹底・卒業時のごみ対策
【防災・防火・危険物】	・大規模地震対策特別措置法 ・消防法 [危険物の規制に関する政令]	防災・防火管理規程	・（年1回）防災・防火訓練時に消防設備の説明 ・備蓄倉庫の点検 ・大学祭模擬店への燃料安全指導 ・危険物屋内貯蔵所の安全管理
【放射性物質】	・放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律 ・核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律	エックス線等障害予防規程 エックス線等障害予防委員会規程 核燃料物質計量管理規程	・講演会の実施 ・健康診断の実施
【高圧ガス】	・高圧ガス保安法		・ポンベ管理の強化 ・液体窒素貯槽利用者保安講演会の実施
【実 験】	・遺伝子組換え生物等の使用等の規制により生物の多様性の確保に関する法律 ・動物の愛護及び管理に関する法律	遺伝子組換え実験安全管理規程 遺伝子組換え実験安全委員会規程 研究倫理規程 動物実験規程、動物実験委員会規程	・封じ込め状況の確認 ・二重使用についての審査
【安全衛生】	・労働基準法 ・労働安全衛生法 ・学校保健安全法	安全衛生管理規程 安全衛生委員会規程	・産業医・衛生管理者の構内巡視・施設改善 ・アスベスト含有建材のリスク管理、及び適正撤去 ・附属学校の VOC 測定支援
【化学物質】	・消防法 ・毒物及び劇物取締法 ・労働安全衛生法 ・PRTR 法（特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律） ・農薬取締法 ・水銀による環境の汚染の防止に関する法律	化学物質管理規程 化学物質管理委員会規程 化学物質管理支援システム取扱要項	・化学物質管理に関する調査（毒物・劇物等） ・化学物質管理支援システムの運用推進 ・化学物質管理に関する調査及び講習会の実施 ・化学物質リスクアセスメントの実施

環境報告書ガイドラインとの対照

本学発行環境報告書と環境報告書ガイドライン 2018（環境省）とを比べ、適切な表記・記入がされているか確認をします。

頁	環境報告書2022	環境報告ガイドライン(2018年度版)による項目
1	目次	【1】 1.環境報告の基本的要件
2		
3	学長メッセージ	【2】 1.経営責任者のコミットメント
4	理念・環境方針	【2】 7.長期ビジョン 【2】 8.戦略
5	沿革の略図 キャンパス概要	【2】 5.ビジネスモデル
6		
7		
8		
【1】 教育大学としての特色を生かした環境活動		
9	Pick up	【2】 3.ステークホルダーエンゲージメントの状況 【2】 9.重要な環境課題の特定方法 【2】 10.事業者の重要な環境課題 【3】 3.生物多様性
10		
11	大学教員の取組	
12		
13		
14		
15	附属学校園の取組	
16		
17		
18		
19	学生の取組等	
20		
21		
22		
23		
24		
【2】 サステナブルキャンパスを目指して		
25	温室効果ガスCO ₂ 抑制状況	【1】 2.主な実績評価指数の推移
26		【2】 7.長期ビジョン 【3】 1.気候変動
27	マテリアルバランス(環境負荷状況)	【2】 6.バリューチェーンマネジメント
28	総エネルギー投入量の抑制	
29	グリーン調達の推進状況	【2】 6.バリューチェーンマネジメント
30	水資源投入量の抑制	【3】 2.水資源
31	廃棄物排出の抑制	【3】 4.資源循環
32		
33	水質汚濁防止の取組状況 大気汚染防止の取組状況	【3】 6.汚染予防 【3】 5.化学物質
34	化学物質取扱及び管理状況	
	PCB含有廃棄物の管理状況	
	水銀含有廃棄物の管理状況	
35	美化活動	【2】 10.事業者の重要な環境課題
36	その他の活動	
37	環境配慮の仕組み	【2】 2.ガバナンス
38	環境報告書ガイドラインとの対照	【2】 4.リスクマネジメント
【3】 評価		
39	学外者からのご意見	【2】 2.ガバナンス
40		【2】 4.リスクマネジメント

3 評価

学外者のご意見



刈谷市

環境推進課

刈谷市ではカーボンニュートラルの達成に向けた取組の一つとして、今年度、本市と知立市及び事業者が共同で新電力会社を設立し、刈谷知立環境組合クリーンセンターの廃棄物焼却熱による発電電力を活用した、エネルギーの地産地消及び地域内の脱炭素化の取り組みを進めてまいります。また、生物多様性の保全のため、特定外来生物駆除の取り組みを進めております。

刈谷市と愛知教育大学は環境について共同で様々な活動を行う中、今年度は特定外来生物であるオオキンケイギク駆除活動に愛知教育大学附属高校の皆さまがご参加され、生態系保護や生物多様性についての学び

の場とすることができました。

貴学におかれましては、サステナブルキャンパスを目指し、啓発活動や省エネ機器の導入促進等によるエネルギー使用の効率化、3 Rの推進による廃棄物排出量の抑制など、カーボンニュートラルの達成に向け大いに貢献いただくとともに、水質汚濁の防止や大気汚染の防止に対する取組、環境美化活動の実施など、学長を中心とした環境保全の推進体制整備に積極的に取り組まれ、改めまして感謝を申し上げます。

今後とも愛知教育大学の先進的かつ多様な取り組みが学内にとどまらず、地域や企業等に展開され、持続可能な社会の実現に結びつくことを期待しております。

プロフィール

令和4年2月に、2050年までに二酸化炭素の実質排出量ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ」表明。目標達成に向けてエネルギー地産地消の取組や再生可能エネルギーの積極的活用、家庭の省エネ、創エネ、蓄エネ等の推進を図る。

名古屋市

環境企画課

国連の「SDGs 報告2021」では、新型コロナウイルス感染症の拡大により、極度の貧困、飢餓などの脆弱層への影響が生じたり、教育部分ではロックダウンにより学校に通えない子どもが増えたりするなど、2030年のSDGs達成に大きな影響を及ぼしていると報告されています。また、気候変動や生物多様性の保全など環境にかかる問題は、異常気象や自然災害、農業や水の問題など様々な影響し、喫緊の課題となっています。環境課題を含めたSDGsにかかる課題に向けて、自治体や企業、NGOなどがパートナーシップにより解決を図ることが必要です。

名古屋市は、令和元年7月に「SDGs 未来都市」に選定されたことを受け、なごや環境大学に「SDGs 未来創造クラブ」を設置し、「人づくりプロジェクト」

と「まちづくりプロジェクト」の取り組みを進めてきました。とりわけ「人づくりプロジェクト」では愛知教育大学理科教育講座大鹿研究室の皆さまにお力添えをいただいた小学生のSDGs学習プログラムにより、未来の持続可能な社会の担い手の育成に取り組んでいるところです。

2015年から2030年の間でちょうど中間地点である今年度の報告書では、自らの行動とSDGsの目標を結びつけられるポスターを作成し、それを活用した授業実践や、自然体験の指導のため、学生が森に入り竹細工や木登りなどの体験を行い、森の魅力を学ぶなどの新たな取り組みが報告されており、今後ますます持続可能な社会の担い手の育成が推進されるものと期待しております。

プロフィール

令和元年7月、内閣府より「SDGs 未来都市」に選定。産学官民の共同のプラットフォームである「なごや環境大学」に「SDGs 未来創造クラブ」を設置し、市民・事業者のSDGs達成に向けたパートナーシップの取り組みを創出するまちづくりと次世代を担う子どもたちのSDGsを学ぶ仕組みをつくる人づくりのプロジェクトを推進してきました。

岡崎市

環境政策課

岡崎市では、地域の特色を活かした環境教室を推進しています。例えば、学区の川に住む生き物で水質を調べる授業や、天然のゲンジボタルが多く生息する鳥川地区で、水辺環境や自然を保護することの大切さを学ぶための授業などを市職員が出前授業として実施しています。特に鳥川地区での授業は、「ホタル学校」という、閉校した小学校をホタルの博物館として再生した施設を利用することで、地域の環境や歴史もより深く学ぶことができます。

愛知教育大学と岡崎市教育委員会は、多様な教育的分野で協力し、学校教育の発展と人材の育成に寄与することを目的として連携・協力に関する協定を2021年に締結しました。愛知教育大学附属学校の児童・生徒

のみなさんには、岡崎市の公共施設の見学などを通して、環境教育・活動について学んでいただいています。

「教育大学としての特色を生かした環境活動」では、愛知教育大学の各附属学校における環境活動が数多く報告されています。どの学校においても、教科学習に環境学習を加えて実施しつつ、各学校が独創的にSDGs、ESDについて積極的に取り組んでいる様子が見え、常にSDGsの達成のために何か行動を起こすことができないかと意識していることが分かります。

SDGs達成のための方法は一つではありません。地域が違えば最適な方法も違います。今後も、各学校の特色ある環境活動とSDGsの推進を期待しています。

プロフィール

令和元年7月に内閣府より、「SDGs 未来都市」に選定。

2050年のゼロカーボンシティの実現に向けて、市域の地域特性、自然環境、産業構造などを総合的に勘案した施策を全庁的に推進するために、令和3年8月1日に市役所内部組織として「岡崎市ゼロカーボンシティ推進本部」を設置。中心市街地や公共施設などで再生可能エネルギーの普及拡大を図っている。

協働による重層的な SDGs キャンパスへ

新海 洋子（一般社団法人 SDGs コミュニティ 代表理事）

本報告書を読ませていただき、ここ数年感じるのは、貴大学のSDGs取組の多様性です。サステナブルキャンパスとしてのハード面、教員養成・研究機関としての学術面、地域連携、学生の主体的参画などそれぞれのリソースを活かした工夫あふれる取組が魅力であり、貴大学の強みだと捉えています。そして、すべての取組みには必ず対象となる人が存在しており、それぞれの場面と様々なアプローチによって質の高いプログラムが実践され、SDGs人材が豊かに育てられていることがじわじわと伝わってきます。その貴大学のサステナブル取組の次のステージは以下の2点だと考えます。

1 点目は、ゼロカーボン・キャンパスへの挑戦です。気候危機は待ったなしであり、世界も政府も自治体もアグレッシブな目標を掲げています。大学の果敢

な取組も必須です。いかにゼロカーボン・キャンパスをつくるか。貴大学の特質、専門性、ネットワーク、研究成果を活かして検討いただきたい。

もう1 点は、教員間及び学生間の連携、協働による重層的な取組の創出です。SDGsは個別課題の同時解決を可能にします。大学でのSDGs取組も同様であり、個別に実施されるだけではなく、それぞれを組み合わせて協働することによって、より質の高いSDGs人材の育みやゼロカーボンに向けての課題解決を可能にすると考えます。

2030年まであと8 年。学生、教職員、そして卒業生のSDGs達成のための当事者意識と行動を育むサステナブルキャンパスとして、その存在価値の一層の高まりを期待しています。

プロフィール

大学卒業後、財団法人名古屋YWCAに就職。その後、NPO 法人中部リサイクル運動市民の会に就職し環境教育事業担当。1999 年国連大学・環境省が設置する地球環境パートナーシッププラザに出身。NPO 法人ボランティアネイバーズに就職し、2005 年9 月～2018 年3 月まで環境省中部環境パートナーシップオフィス、2007 年中部地方 ESD 活動支援センターで中部7 県の ESD 事業等に取り組む。2019 年に一般社団法人 SDGs コミュニティ設立。